

根来寺坊院跡



重要文化財 大師堂

平成7年3月

和歌山県教育委員会

根来寺坊院跡

平成7年3月

和歌山県教育委員会



根来寺山内遠景（南上空から）



根来寺山内遠景（東上空から）

序 文

本県那賀郡岩出町に所在します根来寺は、高野山金剛峯寺・粉河寺・熊野三社と並ぶ県下有数の寺院であり、聖地でもあります。この根来寺は、中世末期羽柴秀吉の紀州攻めのおり、大伝法堂の一画と山門を除きことごとく焼失したことは皆様もよくご存じのことと思います。

昭和51年、広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査以来、本年度の調査で19年間にわたり発掘調査を実施してきたところです。この間、財団法人和歌山県文化財センターや岩出町教育委員会による山内各所の発掘調査により、中世根来寺の姿をある程度知ることができるようになりました。

今後は、第1期根来寺坊院跡発掘調査報告書にも示しましたように、この良く残された根来寺山内の保存整備に取り組む所存でありますので、地域の方々をはじめ県民の皆様、また関係機関各位の一層のご協力をお願い致します。

平成7年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 西川時千代

例 言

- 1 本書は、和歌山県教育委員会が国庫補助事業として平成2年度から5ヵ年計画で実施した第二期根来寺坊院跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成2年度から平成5年度までは財団法人和歌山県文化財センターに委託し、平成6年度は和歌山県教育委員会が実施した。
- 3 平成2年度から平成5年度までの発掘調査については、各年度に報告書を刊行しているので詳細については各年度の調査報告書を参照されたい。
- 4 本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。また、遺物の実測図は1/3で掲載した。ただし、遺物写真については任意の大きさである。なお、遺物写真だけのものについては、100番代の番号を付している。
- 5 本書で使用した遺構の略称は下記のとおりである。
SD：溝、SK：土坑、SB：建物、SG：池、SF：道、SX：その他
- 6 平成6年度の発掘調査は和歌山県教育委員会文化財課主幹菅原正明と技師黒石哲夫が担当し、遺物写真は黒石が、トレース及び本書の作成は辻林浩が担当した。
- 7 本書の遺物実測には上垣内真喜子、宮本真由美の協力を得た。
- 8 発掘調査に当たっては宗教法人根来寺に、本書の作成に当たっては財団法人和歌山県文化財センターの協力を得た。

目 次

I	はじめに	1
II	調査	5
1	平成2年度の調査	5
2	平成3年度の調査	5
3	平成4年度の調査	7
4	平成5年度の調査	8
5	平成6年度の調査	9
A	遺構	9
a	I区の遺構	9
b	II区の遺構	10
c	III区の遺構	11
d	IV区の遺構	14
B	遺物	16
a	1区出土の遺物	16
(a)	第1層出土の遺物	16
(b)	第2層出土の遺物	16
(c)	第3層出土の遺物	16
(d)	S K01出土の遺物	16
(e)	S D01出土の遺物	16
b	3区出土の遺物	16
(a)	表土出土の遺物	16
(b)	S K10出土の遺物	17
(c)	S K13出土の遺物	17
(d)	S K19出土の遺物	17
(e)	S D01出土の遺物	17
(f)	S X03出土の遺物	17
C	4区出土の遺物	17
(a)	S K01出土の遺物	17
(b)	S B01出土の遺物	17
(c)	S F01出土の遺物	17
III	まとめ	18
IV	根来寺坊院跡の保存と整備	19

挿 図 目 次

第1図	位置図	1
第2図	根来寺山内地形及び調査地点	3
第3図	円明寺推定地周辺古絵図	5
第4図	II区遺構平面図	5
第5図	豊福寺推定地周辺古絵図	6
第6図	III区遺構平面図	6
第7図	IV区遺構平面図	7
第8図	大伝法院推定地周辺古絵図	7
第9図	密厳院推定地周辺古絵図	8
第10図	瓦窯平面図	8
第11図	泉庭測量図	9
第12図	大門周辺古絵図	10
第13図	I区遺構平面図	10
第14図	S D 01実測図	11
第15図	II区遺構平面図	11
第16図	III区遺構平面図	12
第17図	S B 01実測図	13
第18図	S G 01実測図	14
第19図	御廟周辺古絵図	14
第20図	IV区遺構平面図	15

図 目 次

図 1	I区出土遺物実測図	図 3	III区出土遺物実測図
図 2	III区出土遺物実測図	図 4	IV区出土遺物実測図

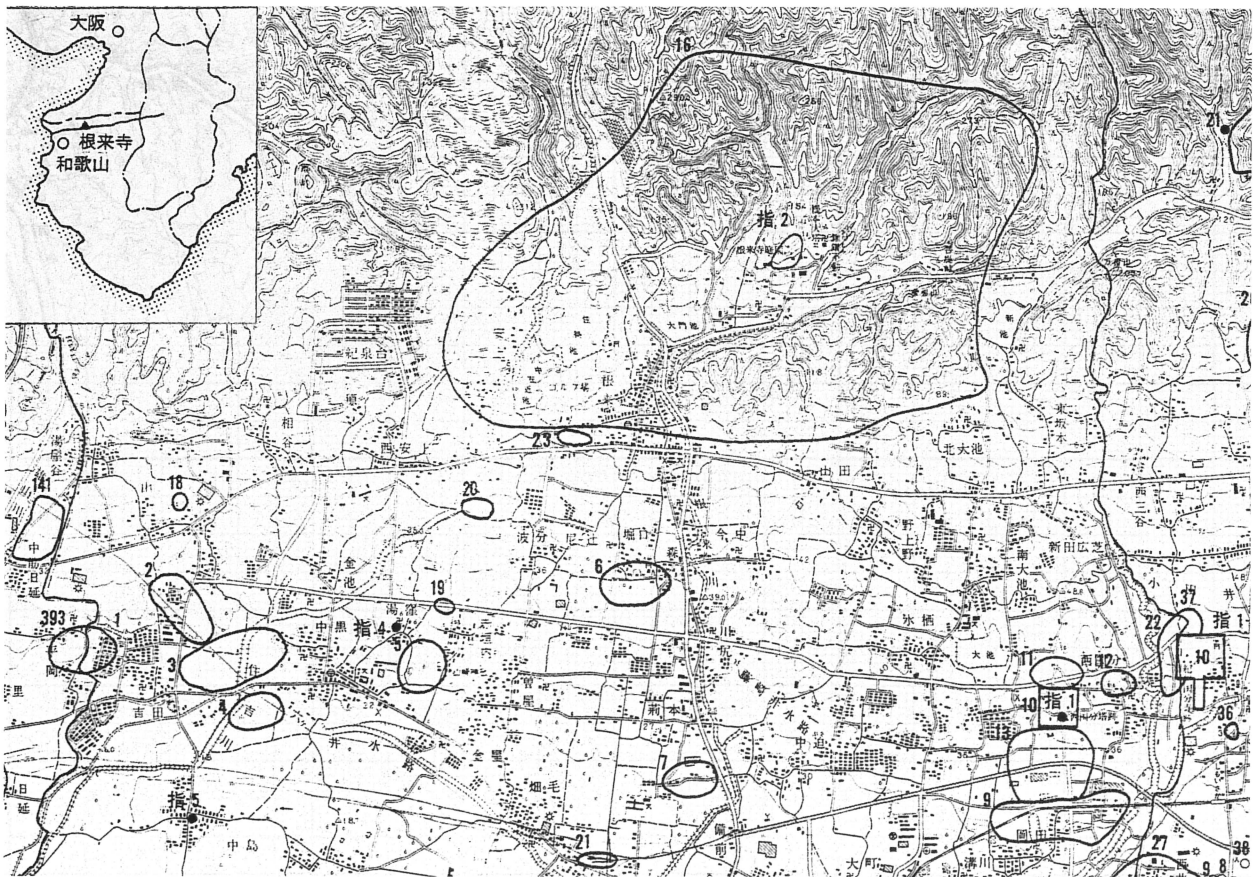
図 版 目 次

図版 1	I区検出遺構写真	図版 6	III区出土遺物写真
図版 2	III区検出遺構写真	図版 7	III区出土遺物写真
図版 3	IV区検出遺構写真	図版 8	IV区出土遺物写真
図版 4	I区出土遺物写真	図版 9	IV区出土遺物写真
図版 5	I区出土遺物写真		

I はじめに

根来寺は、紀ノ川の北岸、和泉山脈南麓の「北山」と呼ばれる峰々とその南の東西に伸びる独立山塊状の「前山」に挟まれた盆地状地形に位置し、行政区画では那賀郡岩出町根来に所在する。

新義真言宗総本山である一乗山大伝法院根来寺は、保延6年(1140)高野山から根来の豊福寺に止住した正覚坊覚饒(賜号・興教大師、嘉保2年・1095～康治2年・1143)により開創され、現在も法灯を受け継ぐ名刹であるが、天正13年(1585)羽柴秀吉の紀州攻めによりその数2千ともあるいは3千とも伝えられた坊院堂舎は、大伝法院の一画と山門を除き一山ごとごとく焼失する。いわゆる「天正の兵火」がこれである。焼失をまぬがれた建物のうち多宝塔(国宝)と大師堂(重要文化財)は現地に残るが、大伝法堂は秀吉の部下の文蔵司の手により破却され、本尊の丈六三尊像とともに運び去られた(『顕如上人雑記』)。また、山門も羽柴秀長により大和郡山城の城門に移築された。この惨憺たる状態からの復興は、兵火後15年がたった慶長5年(1600)関ヶ原で勝利した徳川家康の再興許可に始まる。兵火後25年がたった慶長15年には、紀州藩主となった浅野幸長により大伝法堂の三尊像が返還され、また各地に難を避けていた学侶・行人の帰山が相次ぎ、元和元年(1615)には59の復興寺院を数えるまでになった。その後も復興寺院の数は増え、寛永10年(1633)には78、宝永7年(1710)には86を数え、寛政、文化、文政と主要伽藍の再建を果たし、嘉永5年(1852)の大門の落慶供養をもって復興が終わる。



第1図 位置図

現在、境内には天正の兵火から焼失を免れた国宝の大塔・重要文化財の大師堂ほか、江戸時代に再建された県指定文化財の大伝法堂・大門・不動堂・常光明真言殿、町指定文化財の聖天堂・行者堂、九社明神・奥の院、子院の円明寺・愛染院・蓮華院、明治以降に建てられた菩提院・三部権現・本坊・元の県議会議場を移築した一乗閣、子院の律乘院・密巖院が点在するだけであるが、旧境内地全域に子院敷地の石垣が水田の区画として残されており、往時あるいは再興時の姿を偲ばせてくれる。

根来寺で発掘調査が開始されたのは、紀ノ川北岸に計画された広域営農団地農道整備事業（広域農道橋本岩出線建設事業）が根来寺山内に及んだことに端を発する。この工事に立会って調査を行ったところ、中・近世の遺構や遺物、また天正13年の兵火を示す焼土層が検出された。昭和49年3月県教育委員会発行の「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」にも周知の遺跡として記載されていなかったように、誰一人として、中世や近世の根来寺がこれほど良好な状態で往時の姿を地中に留めていようとは思ってもいなかった。その後、10ヵ年にわたる重要遺跡確認調査、大規模農道の建設、町道の改修、民家の新改築等に伴う発掘調査を経て、おぼろげながら中近世とりわけ中世根来寺の姿がその輪郭を現しつつあり、これまでに以下のようなことが判明している。

1. 前山稜線には山門と櫓や土塁、南斜面には竖堀・堀切などが検出されているが、このことから根来寺が城郭あるいはこれに準じる構造を持っていたとは即座に断じることはできないまでも、軍事的防御施設を備えていたことは明らかである。なお、根来街道を隔てた西には、『那賀郡誌』にみえる「根来古城」が位置していたことが近年の調査で明らかになった。

2. 坊院は山内の中央部だけでなく、前山の北斜面や北山南斜面谷筋の奥深くまで建てられている。まず山内中心部（円明寺周辺）に子院の建立が始まり、その後周辺部に広がり、最盛期には北山の谷奥まで子院の建立がみられるようになる。

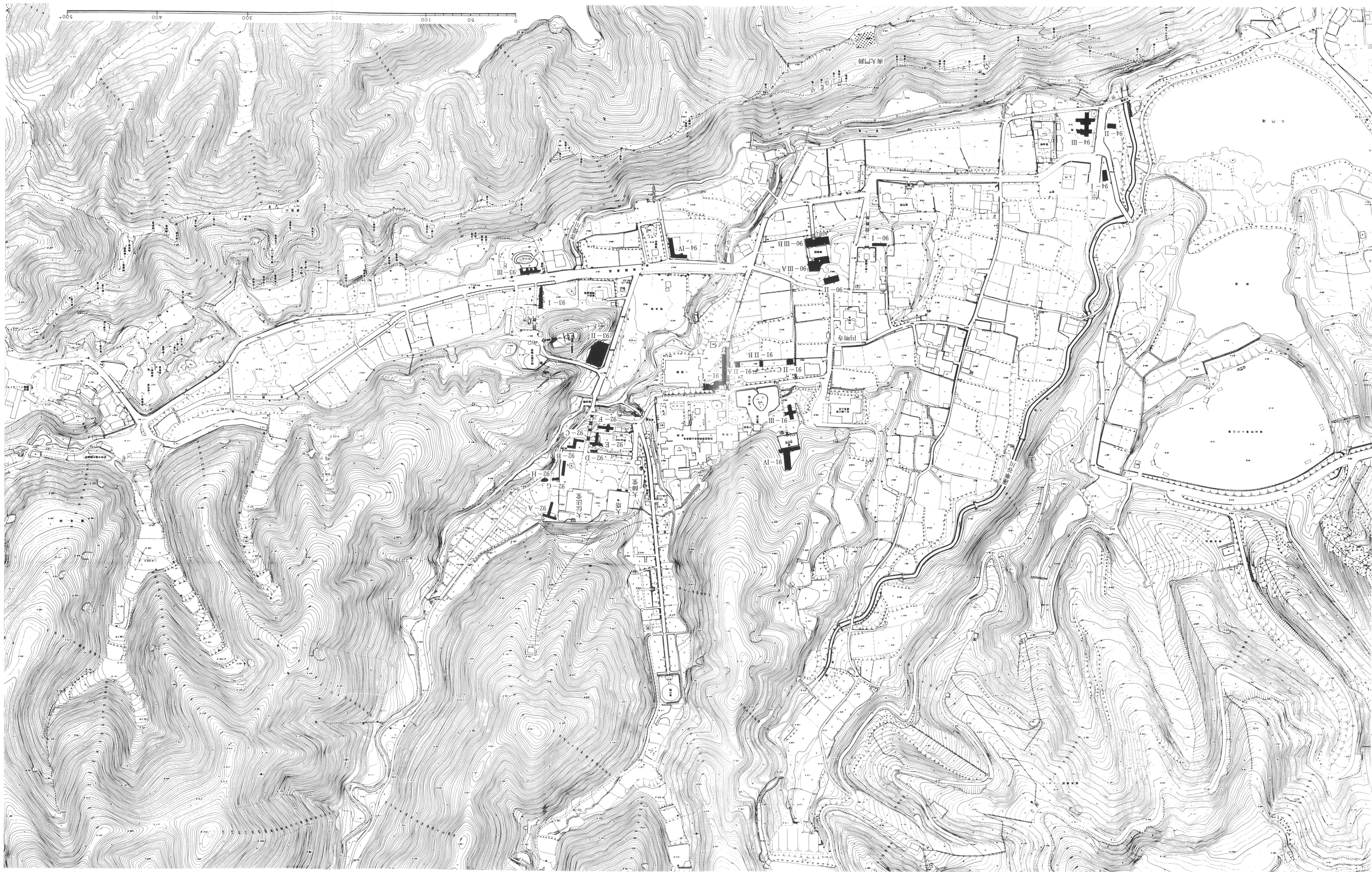
3. 山内は南西に向かう緩傾斜地であるため、坊院の敷地の多くは石垣を築き雛壇状に造成されている。石垣の高さは坊院の立地条件により異なるが、これまでの調査で残りのよいもので5.5mを測る。敷地はほぼ矩形を呈し、四周に土塀を巡らせ、正面に門を切り開き、敷地と道路に高低差のある場合は階段を設けている。

4. 坊院内には主屋、付属屋、堂、倉庫が配される。平地に立地する坊院の建物の多くは瓦葺であるが、谷筋のそれは瓦が出土しないことから屋根は柿葺・板葺ではないかとみられる。また、数は少ないが園池も検出されている。

5. 山内から出土する遺物は12世紀から近世におよび、それらには仏具・武具・工具・装飾品などの金属製品、宝篋印塔・五輪塔・板碑・硯・砥石・臼などの石製品、漆器・下駄・櫛・箸・曲物・桶・建築部材などの木製品、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、美濃・瀬戸系施釉陶器、備前焼・丹波焼・信楽焼・常滑焼などの焼締陶器、青磁・白磁・染付などの中国製磁器、朝鮮製陶磁器など多種多量であり、これらに加えて復興後の遺物として多量の伊万里磁器などがある。

今次の5ヵ年計画の発掘調査は、円明寺ほかの根来寺坊院跡の最も重要な部分の整備を図るための基礎調査であり、平成2年度には宗祖覚鑿建立の円明寺跡とされる現円明寺周辺、平成3年度には豊福寺跡とされる本坊周辺、平成4年度には大伝法院跡とされる大伝法堂周辺、平成5年度には密巖院跡とされる不動堂周辺、本年度は主に大門跡を確認するための発掘調査を行った。

2 図 根来寺山内地形及び調査地点



II 調査

平成6年度の調査成果を述べる前に、過去4年間の調査概要を再録しておく。

1 平成2年度の調査

山内のほぼ中心部に位置し、開山の地とされる円明寺周辺の3地点について発掘調査を実施した。当地域は現在でもこんもりとした森となっており、その一画に江戸時代後期に建てられた御影堂と拝殿が残る。この周辺の過去の調査では、根来寺の創建時に近い12世紀後半から13世紀代の遺物が出土している。

I区は三部権現の南西に位置するが、後世にかなりの削平を受けたもようで、顕著な遺構、遺物は検出されていない。

II区は円明寺の南東約50m地点に位置し、これまでの発掘調査では例をみない幅約1.2mの築地塀が検出され、天正以前に大規模な子院が存在が想定されている。この築地塀は、現在の水田区画あるいは過去に行った周辺の調査で検出され子院区画とその方位を同じくすることから、円明寺の築地塀の可能性もある。また、これも類例の少ない、便所ではないかとみられる長径80cm、短径60cm、深さ60cmを測る上方に開くように積み上げられた石組遺構も検出されている。

III区は律乗院の前庭と裏庭である。ここでは江戸時代の井戸・埋桶・石組の溝、天正の兵火にかかる時期のものとして溝・土坑などを検出した。

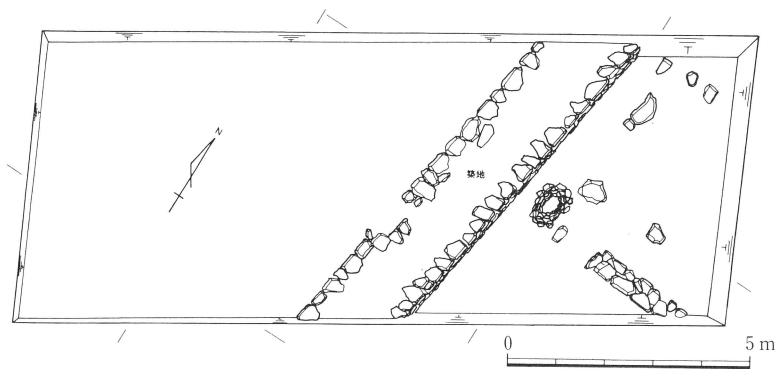
2 平成3年度の調査

根来寺開山以前、当地に建立されていたとされる豊福寺跡推定地および根来寺中門の確認をおこなうため4地点で調査を実施した。

豊福寺については具体的な資料は残されておらず、またその位置も定かではないが、円明寺跡とされる地区の北東、現在の本坊西半部から九社明神の鎮座する辺りまでの地が比定されている。



第3図 円明寺推定地周辺古絵図



第4図 II区遺構平面図

I区は現光明殿への参道東側に当たる地点である。この調査区では、現参道より一時期古い参道の縁石と石段を検出した。石段の間隔は不規則で広い部分で約4m、狭い部分で約2mである。おそらく地形に則したためとみられる。この石段は出土遺物などから江戸時代後期以降のものと思われることや、現参道が明治25年に老門の新築に伴い作り直されたことが知られているところから、江戸時代後期から明治25年までの間使用されていた参道とみられる。

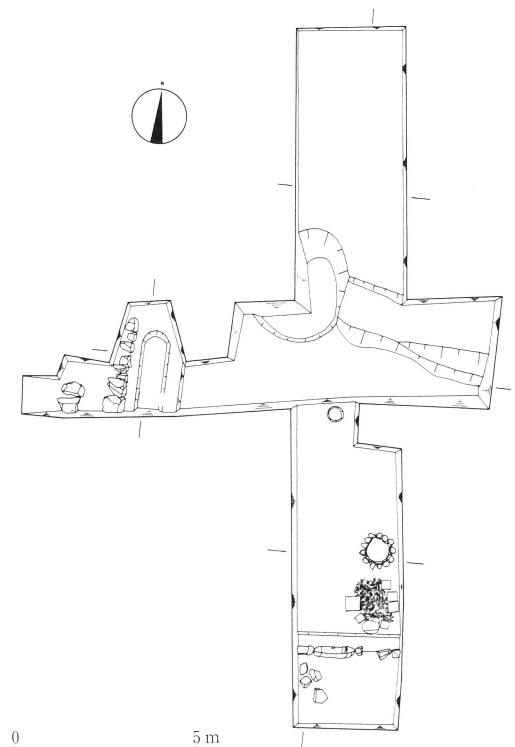
II区は参道西側、蓮池の南に当たる地点である。本地点は、近世の絵図では「堂ヤシキ」と記された細長い空き地となっており、現在でもこの部分は絵図通りの形状で残されている。ここでは幅約1mの間隔をあけ溝2条が検出されている。この溝は出土遺物から江戸時代中頃に廃絶したものと思われる。

III区は本坊の西にある聖天池の西側、九社明神の参道脇にあたる地点である。現在は杉木立となっているが、中世根来寺の姿を伝えているといわれる絵図では、この周辺には地藏堂・宝塔・西塔などの建物が描かれている。

検出遺構には土坑、井戸、石敷遺構などを検出した。土坑は隅丸方形で、ほぼ垂直に掘られており、埋土から13世紀後半の瓦器碗や土師器皿などが出土している。おそらく木枠井戸であったものと思われる。井戸は径70cm、深さ1.5m以上を測る石組で比較的小振りで、雑な積みである。下方に向かいやや開き気味の構造であることから天正以前に造られた可能性もあるが、出土遺物に近世の陶製灯明皿がみられることから、近世に入ってから廃絶したもの判断される。この井戸の南に隣接して石敷遺構が検出されている。五輪塔の笠部を逆にし不整形な馬蹄形に配置したもので、その内部にレベルを意識したかのように玉石をほぼ同じ高さに敷き詰めた遺構が検出されている。井戸との関係からみれば、井戸が造られた後この石敷遺構が造られており、井戸に伴う流し場としての施設である可能性が高い。



第5図 豊福寺推定地周辺古絵図



第6図 III区遺構平面図

Ⅳ区は九社明神社の背後に当る小さな谷筋に位置し、木の生い茂る荒蕪地であるが、約10cmの表土下には平均80cmの厚さで黄色の山土が堆積していた。この山土は均一できれいな土であり、一気に埋められた様子が窺える。この堆積土中からは16世紀代の土師器皿、備前焼の鉢、五輪塔などの石造遺物が出土しているが、近世の遺物は一片も出土していない。前述の絵図にも九社明神社が描かれていることから、天正の兵火以前に九社明神社を現在の形にするにあたり、背後のこの地を一段高く造成・整備したものである。この黄色の山土直下、地山直上において200個あまりの石造遺物が出土した。いずれも散乱した状態であり、原位置を保ったものとは考えがたい状況である。これらは投棄されたとは考えられず、この谷筋に安置されていたものようである。

平成3年の調査では根来寺の前身ともいえる豊福寺の時期までは遡れないまでも、根来寺建立期に近い遺構の検出されたことは注目する必要がある。

3 平成4年度の調査

根来寺の中心伽藍である大伝法院を探るため、旧大伝法院周辺の調査を行うこととしたが、旧大伝法院の中心部は、現在も国宝の大塔、重要文化財の大師堂、県指定文化財の大伝法堂が建ち並ぶため、「根来寺伽藍古絵図」に描かれた門、馬頭観音堂、不動堂、普賢院などの跡地と考えられる地点で計8本のトレンチ調査を行った。

Aトレンチ 現大伝法堂の東側に東西方向と南北方向に設けたT字形のトレンチである。東西方向のトレンチ西端で現大伝法堂側に面を持つ石列を検出した。検出した石列は1段であるが、割石が多数散乱するところから土堀あるいは石垣であった可能性がある。

Bトレンチ 現大伝法堂の南東に設けたトレンチである。表土直下に薄い焼土層を検出したが、近世以降の焼土層である。焼土層の下層は人頭大あるいはそれ以上の和泉砂岩の角礫を含む黄色土となるが、この黄色土は江戸時代に大伝法堂を再建したときの地業と考えられる。



第7図 Ⅳ区遺構平面図



第8図 大伝法院推定地周辺古絵図

Cトレンチ 大伝法堂正面に位置する階段東側に設けたトレンチである。現在の階段は、大伝法堂とは軸線が東へ扁しているため、後世の所産と考えられるため前身のそれを解明するため調査を行った。このトレンチでは土塀の基礎が検出されたものの、近世以降の造作と考えられるが時期を限定するには至っていない。

Dトレンチ 現大伝法院を囲む土塀前面にこれと並行して設けたトレンチである。地山直上でわずかに天正の兵火と考えられる焼土層が見受けられたが、この焼土層の上で石列を検出した。

Eトレンチ 現大伝法堂正面の階段西側に設けたトレンチである。Cトレンチで検出した石垣と対称となる土塀の基礎を検出した。

Fトレンチ Eトレンチを設定した段の下方平坦地に設けたトレンチである。遺構にはEトレンチで検出した石垣の延長とみられる石積みのコーナーを検出したに止まる。

Gトレンチ Aトレンチの南側に設けたトレンチである。客土下で溝を検出したが時期は不明である。

Hトレンチ Gトレンチの東に設けたトレンチである。客土下は整地土で、遺構は検出されなかった。

調査の結果、いずれの地点においても近世再興時の整地が著しく、検出遺構のほとんどは江戸期のものであり、初期あるいは中世根来寺の中心伽藍であった旧大伝法院についてはつまびらかにすることはできなかった。

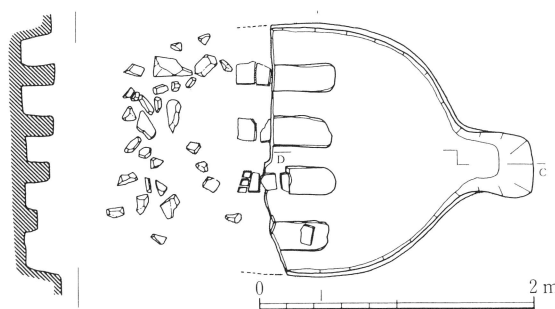
4 平成5年度の調査

根来寺の開祖である覚鑊の高野山での私坊を、頼瑜が正応元年高野山からこの地に移った際、大伝法堂とともに移し、円明寺、神宮寺とともに根来寺の伽藍を構成する主要な子院の一つに密巖院がある。江戸時代の「紀伊名所図會」によれば、密巖院には錐鑽不動堂、求聞持堂、多宝塔、毘沙門堂、鐘楼など多数の建物や施設があったとされている。しかしながら、その明確な位置については不明であるが、現在の不動堂の南側一帯と考えられている。この密巖院及びその周辺を明らかにするため、計3地点の発掘調査を実施した。

I区は広域農道から錐鑽不動堂への参道西側の調査区である。中世遺構の残存状態は悪く、石組井戸を検出したにすぎず、他はすべて18世紀中頃以降の新しい時期のものであった。近世の主な遺構には、暗渠排水溝、埋桶、竹を利用した導水管がある。



第9図 密巖院推定地周辺古絵図

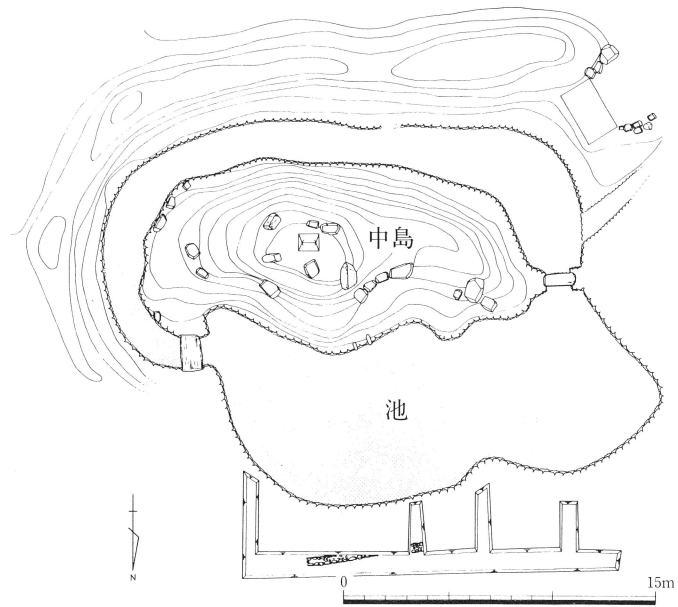


第10図 瓦窯平面図

II区は錐鑽不動堂の西約50m地点に設けた調査区である。尾根の裾部を削り造成した子院敷地跡である。検出した遺構には、中世の遺構として尾根の切土側に擁壁としての石垣、土坑、溝などが、近世の遺構として瓦窯がある。

このうち特筆すべき遺構として瓦窯がある。近世の遺構とはいえ根来寺坊院跡の長い調査の中でも初めてのことである。焼成部は削平を受けているため全容は不明であるが、幅約1.8m、長さは復元で3.5mほどの規模になるものと思われる。焚口部は幅約40cm、燃焼部は一段低く焼成部に向い斜めに立ち上がっていく。分炎柱は、粘土と瓦を交互に積み重ねて作られており、幅20cmで4列の構造になっている。壁面には粘土が貼られているが、厚さ3cmほどにわたって瓦状に固く焼き締まり、その外側の地山も赤く変色している。単独で存在することや規模が小さいことから、差し替え用の瓦を焼いた一時的な窯であろう。

III区は錐鑽不動堂と広域農道を挟み対峙する位置にある泉庭の時期をさぐるために設けた調査区である。従来、この泉庭は形態から室町時代まで遡るものではないかとされてきたものであるが、調査の結果、池の肩よりも低いレベルで江戸時代の目隠塀の基礎が検出された。加えて、平成6年度にこの泉庭の東側約5mの地点に東屋が建設されることになり、岩出町教育委員会が発掘調査を行ったところ甕ピットと呼ばれる埋甕遺構が検出されるなど、この泉庭の時期の再考を促す材料を提供したことになる。



第11図 泉庭測量図

5 平成6年度の調査

天正の兵火以前の根来寺伽藍を示すといわれる「根来寺伽藍古絵図」から、古西大門は現大門の位置を大きく外れることなく建てられていたものと考えられる。大門南側での発掘調査（町道北大池線改良工事に伴う発掘調査：1988）では大門跡と考えられる遺構が検出されていないため、本年度の調査では大門の西側、南西側、南側で確認調査を行うこととした。計3地点のトレンチ調査を行い、I区では暗渠排水溝、II区では道跡、III区では半地下式倉庫や池状遺構等を検出した。

また、「根来寺伽藍古絵図」に描かれた廟所跡を確認するため、古絵図に示された「廟所」跡に西隣する地点のトレンチ調査を行ったが、廟所に関連する遺構は検出されず子院の存在を示す埋甕遺構などを検出した。各調査区的主要な遺構については下記のとおりである。

A 遺構

a I区の遺構

大門の西約35mにトレンチを設定し、発掘調査を行った。調査面積は道路や立木による制約があり、約35㎡を発掘したにとどまる。検出遺構は暗渠排水溝だけである。



SD-01 第12図 大門周辺古絵図

調査区北端で検出したほぼ東西方向の石組の暗渠排水溝で、両側に大きな石を立て、その上に大きな蓋石を載せている。蓋石の隙間は小石で埋めている。検出長は 7.8m で、幅は 0.5m、高さは 0.8m である。この石組暗渠排水溝の上部には 5.4m の間隔を開け、2 箇所の開所が設けられている。開所は溝上 0.6m の高さに山状に石を組み上げたもので、その中央に一辺 0.35m の筒状方形開口部を持つ。東側の開所は大きな板石で蓋をし、西側の開所は蓋石に使用していたとみれる宝篋印塔の地輪が内部に落ち込んでいた。この排水溝の上には焼土層が広がっており、天正13年の兵火以前に築造されたものとみられ、おそらく直線的に西に延び蓮華谷川に注ぐものとみられる。

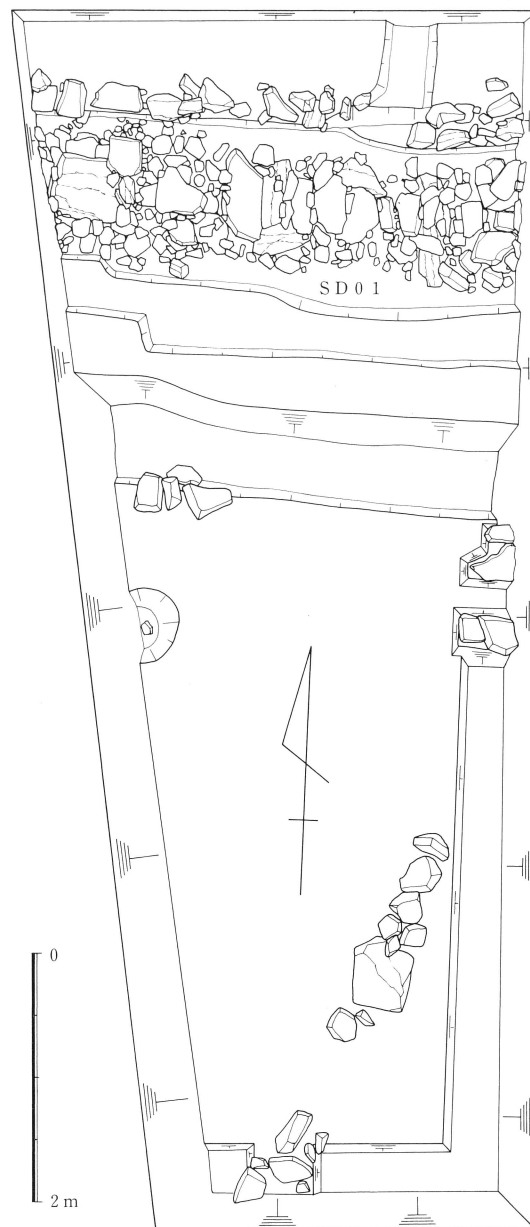
b II区の遺構

大門の西南約70mにトレンチを設定し、発掘調査を行った。調査面積は約29㎡である。

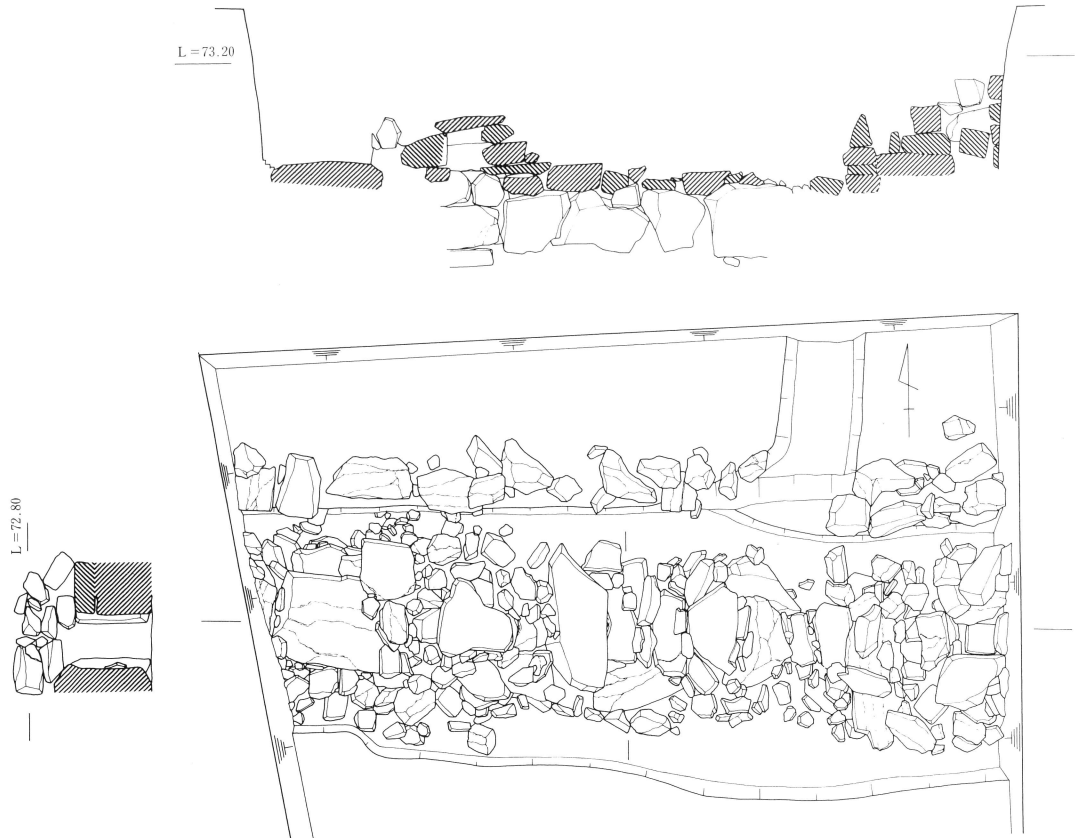
検出した遺構には、上層で石垣の基底部と考えられるものと道路と考えられるものを、下層では土坑1基を検出した。

S F-01 トレンチ上層北東隅で検出した遺構で、石垣の基底部と推定される人頭大の石3個とその南西側に約1mの幅で径1~2cmの扁平な小石を敷いたものである。おそらく蓮華谷川左岸沿いの枝道とみられる。

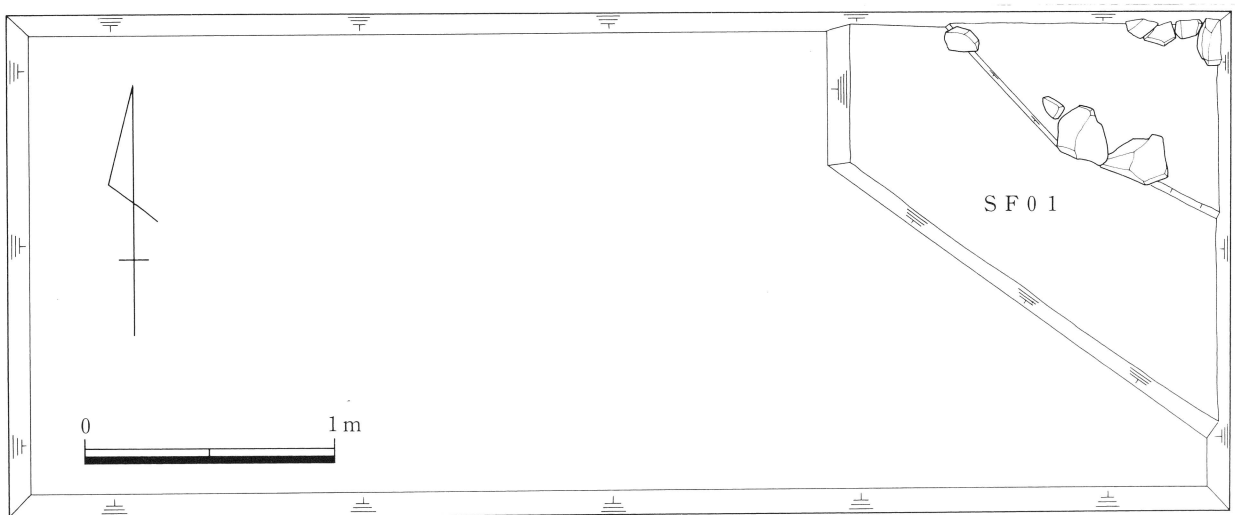
S K-01・02 トレンチ下層で検出したもので、S K-01は不整形、S K-02は長楕円形を呈し、いずれも13~14世紀に属する。



第13図 I区遺構平面図



第14図 SD01実測図

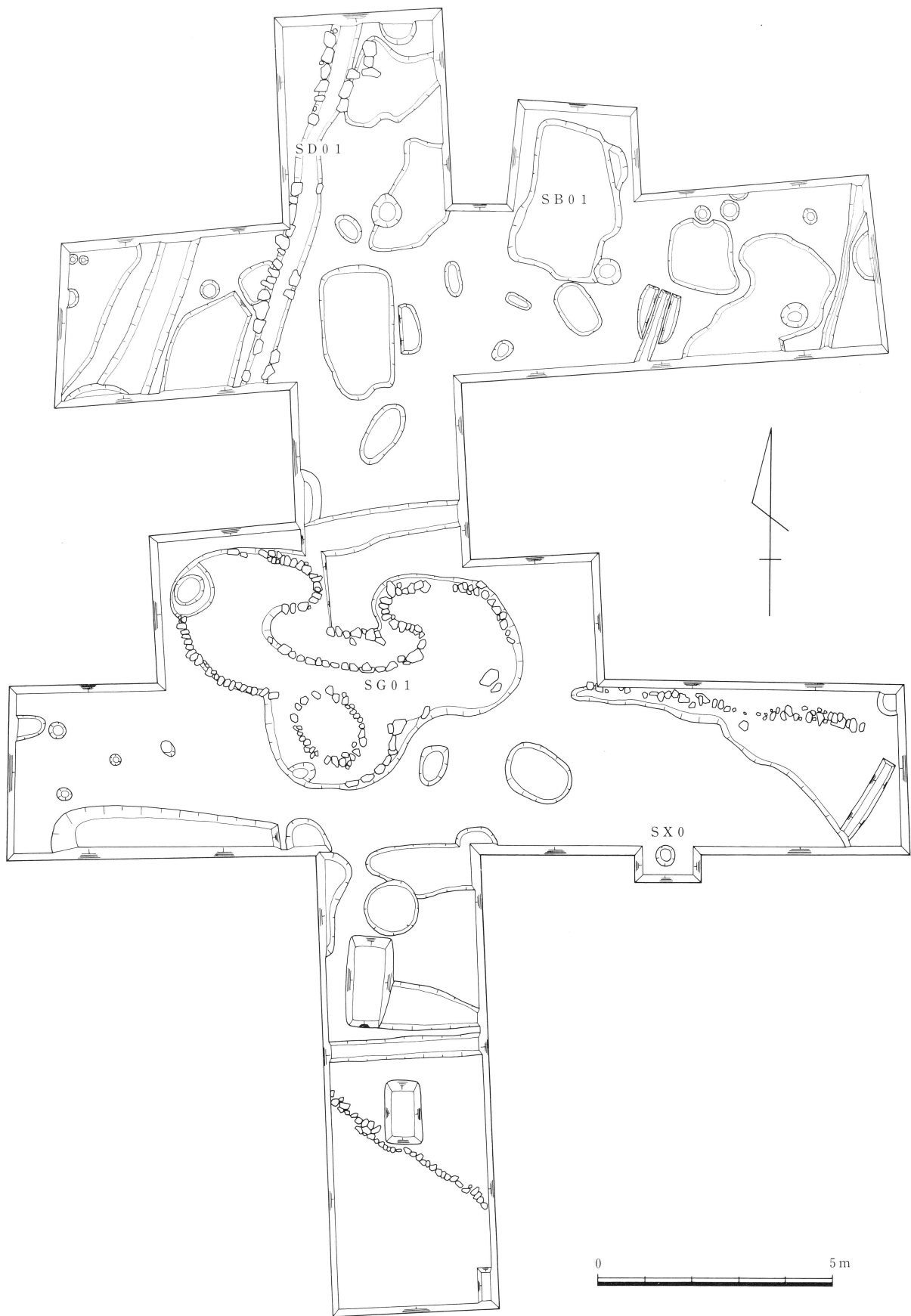


第15図 II区遺構平面図

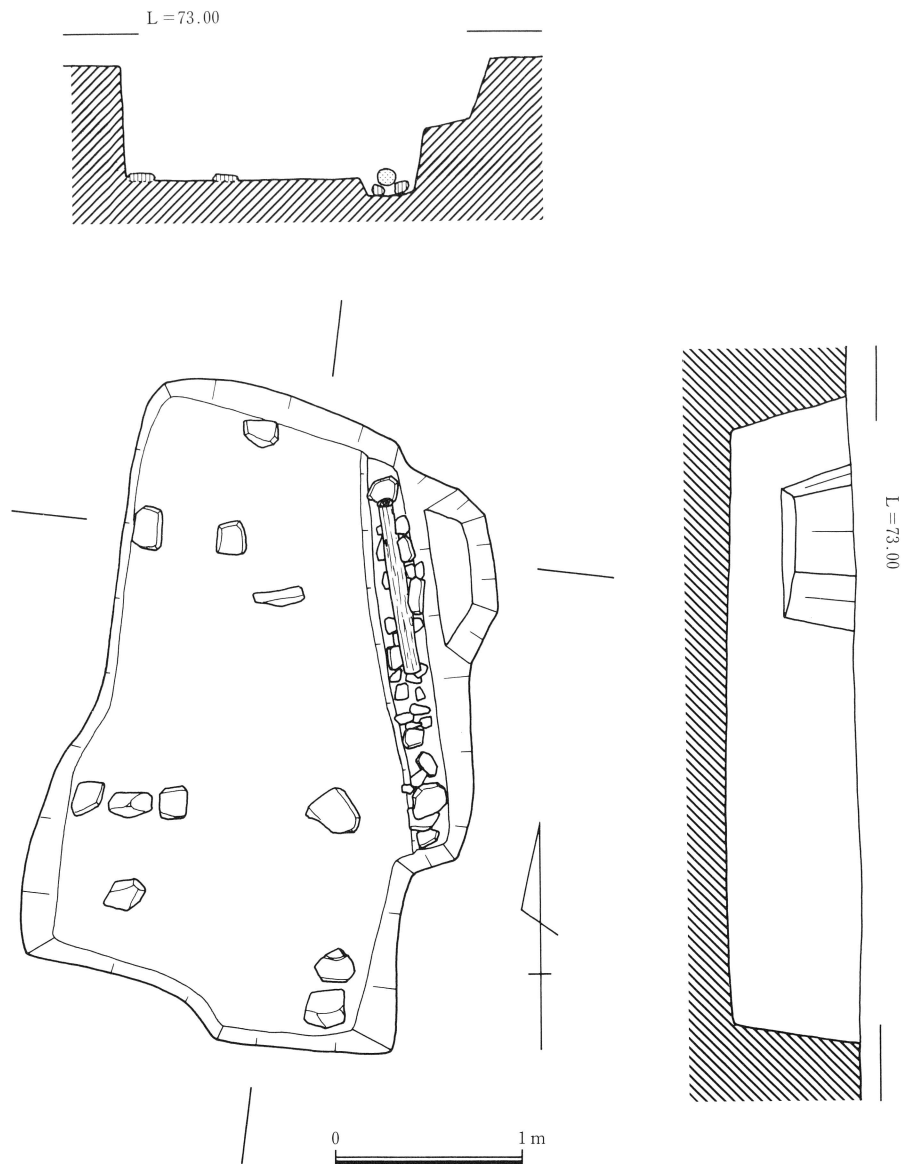
c III区の遺構

大門南側の南に緩やかに傾斜する根来寺駐車場に設けた調査区で、南北のトレンチとこれに直行するトレンチ2本を設定し調査を行い、後に重要な遺構部分について調査区を拡張した。発掘調査面積は約332m²である。

この調査区は、昭和63年に財団法人和歌山県文化財センターが岩出町の委託を受け町道北大池線改良工事に伴う事前発掘調査を行い、半地下式倉庫や井戸、地鎮遺構などを検出した地点の南に当



第16図 III区遺構平面図



第17図 S B01実測図

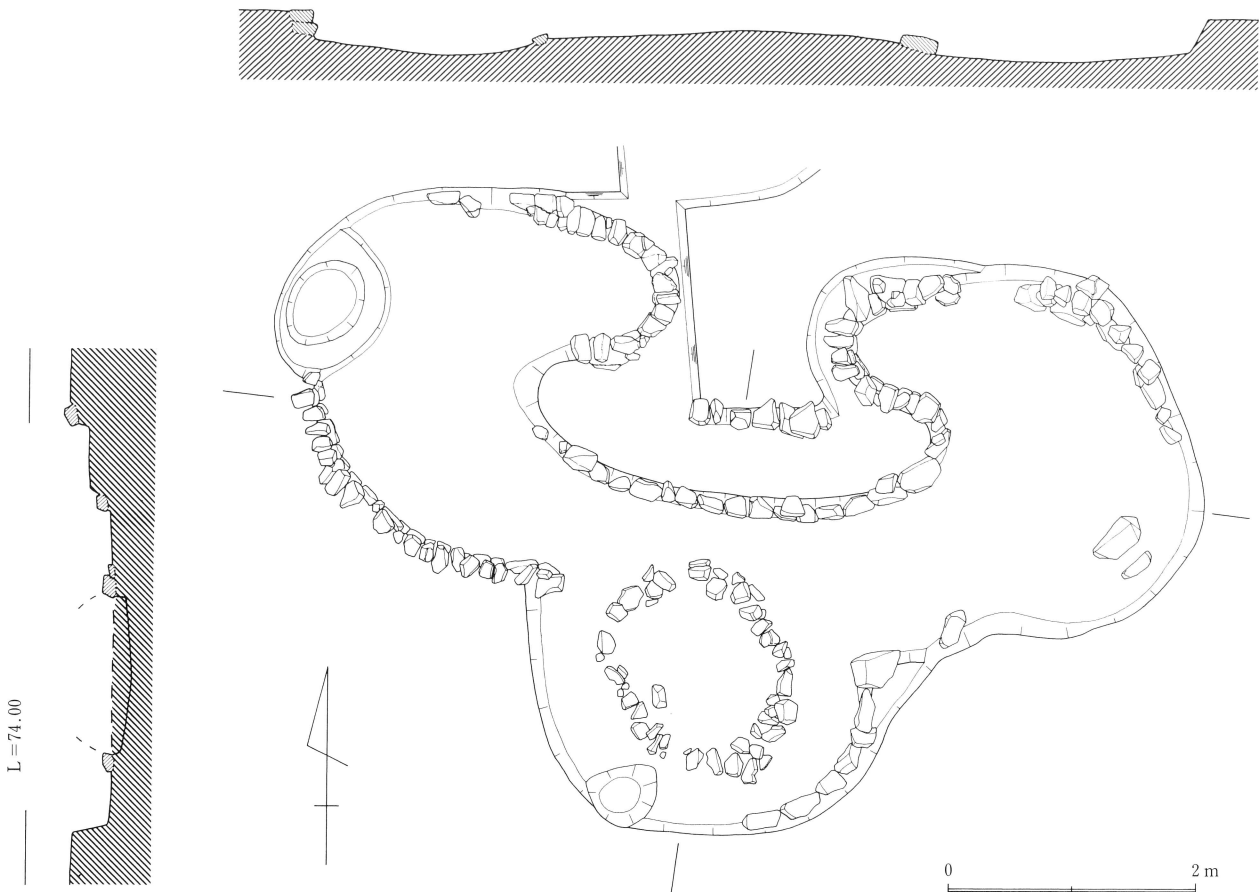
る。検出遺構には溝、半地下式倉庫、埋桶遺構、埋甕遺構、池、石列などがある。

S D-01 南北トレンチの北端で検出した幅0.25m、深さ0.17mを測るやや東に振れる石組みの溝で、延長約8mを検出した。溝の埋土には焼土や炭が詰まり、天正の兵火まで機能していた溝であることを知ることができる。

S B-01 北側東西トレンチで検出した南北長3.2m、東西幅1.95m、深さ0.75mを測る半地下式倉庫で、東辺北隅に階段を造り出している。階段の壁際には人頭大の石を並べており、その上には炭化した木材が残存していた。壁面は同種他の遺構同様、朱色に焼かれている。なお、床面には束石が置かれているが、規則性をもって配置されていないことから、建物の中に取り込まれた穴蔵とみられる。

S X-02 南側東西トレンチで検出した埋甕遺構である。甕は褐釉の掛かった近世の陶器で、便槽として使用されたものとみられる。

S G-01 調査区中央で検出した池状の遺構で、東西長約7m、南北長約5m、深さ0.5mを測



第18図 S G 01実測図

る。北辺には東西長3.5m、南北長1.5mの張り出したがみられる。池の中央には人頭大の石で楕円形に囲った長径約2.5m、短径約1.5mの築山とみられる空間が認められる。池の汀には人頭大の石を2～3段積み、護岸としている。しかし、池底には漏水防止のために粘土を貼るなどの形跡や、導水・排水の施設もなく、また池としての堆積土も認められないことから空池であったと考えられる。遺物の出土は皆無に等しいが、埋土の状態からみて江戸時代のものと思われる。

d IV区の遺構

大塔の南280mにある現御廟の西側蜜柑畑に東西と南北にL字形トレンチをに設定し、発掘調査を実施した。調査面積は約61m²である。検出した遺構には土坑、埋甕遺構、道がある。

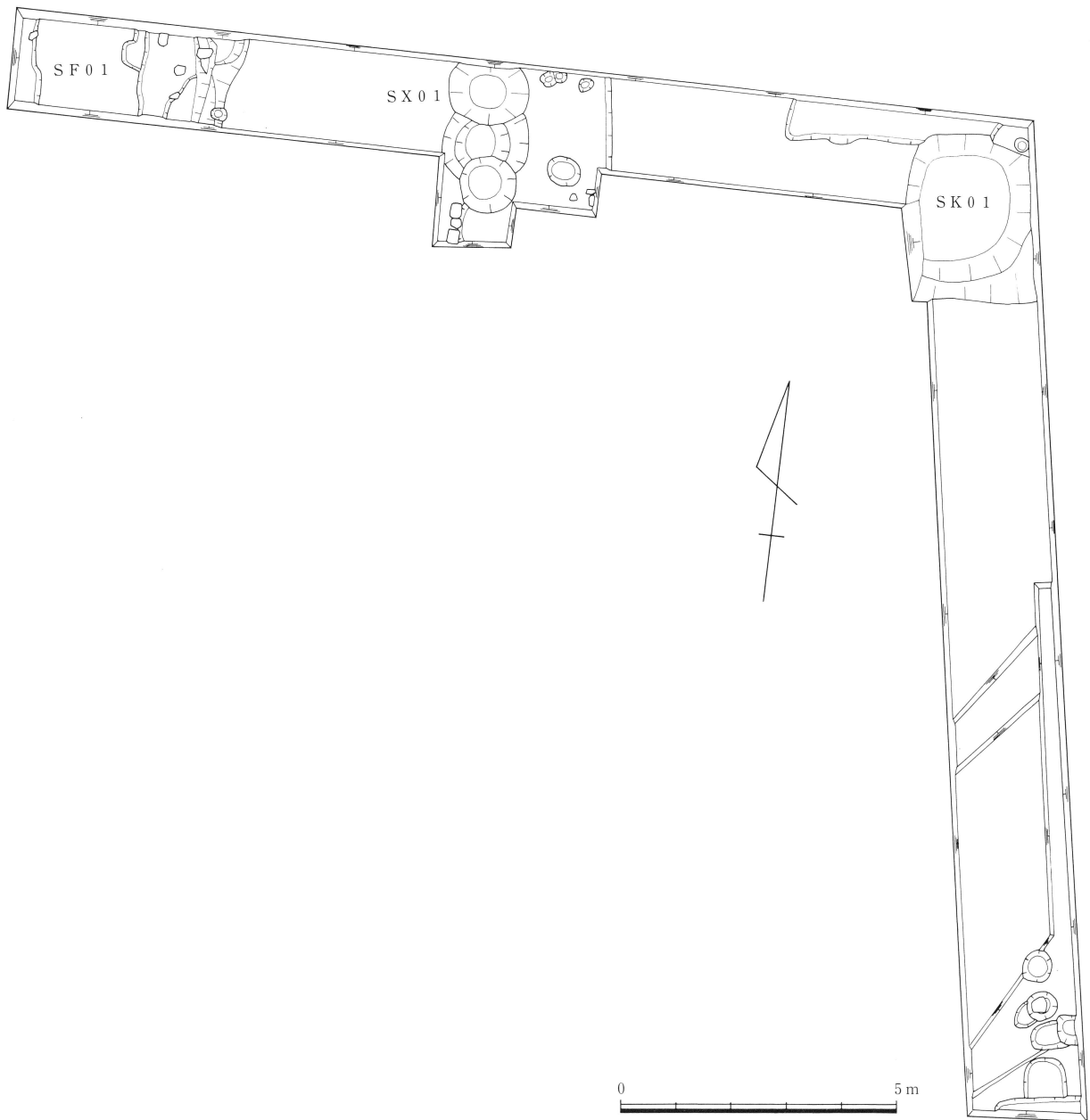
SK-01 L字形トレンチの屈曲部分で検出した方形の土坑で、南北長3.0m、東西長2.2m、深さ0.56mを測る。埋土からは近世の瓦が多量に出土した。



第19図 御廟周辺古絵図

SX-01 東西トレンチの中央部で検出した埋甕遺構で、全容は不明であるが4個体分の埋甕の抜き穴を検出した。埋甕穴は径1~1.4m、深さ0.5~0.7mである。本遺構の埋土からは備前焼大甕や中国製の白磁、染付、焼土、木炭、赤変したスサ入の壁土などが出土している。出土遺物は16世紀後半期のものである。

SF-01 東西トレンチの西端で検出した南北に走る道跡で、幅は約1.8mで路面には小石を敷いている。この道は東側の寺院敷地面に比べ約0.5m低く、寺院敷地と道との間にあったと思われる石垣の石は抜き取られていた。この道の路面直上には厚さ5cmほどの焼土や炭が堆積しており、その上は灰色土と焼土・炭混じりの暗褐色土で埋め立てられており、天正の兵火までは道として機能していたものが、江戸期の再興時に道を廃し、坊院敷地を西側に拡張したものとみられる。



第20図 IV区遺構平面図

B 遺物

a I区出土の遺物

(a) 第1層出土の遺物

表土直下から天正13年の焼土層までの包含層である。この層は、中世の遺物のごく少量混じるが、そのほとんどは近世の遺物である。

1は伊万里の染付蓋付碗の蓋である。体部内面及び高台内は施釉されているが、高台端部は釉が拭き取られている。2も伊万里の製品で、体部に草花文の描かれた、いわゆるくらか茶碗である。3は備前焼の大甕である。

(b) 第2層出土の遺物

第1層の下層である天正13年の焼土層である。4は中国製青磁碗で、高台内及び畳付部以外は施釉されている。体部は灰色を呈し、釉調は明るい緑色を呈している。5は中国製染付の皿である。101は大型の白磁の端反皿である。純白に近い精良な胎土で、釉には光沢があり、畳付の釉のケズリも丁寧である。6は灰白色の胎土に黒褐色の釉の掛かる、美濃瀬戸系の天目茶碗である。口縁端部はやや丸みを帯び、体部外面の露胎部にはケズリ痕を残さない。7・8・102・103は土師器小皿で、ともに赤橙色を呈し、胎土に礫を含む。9は瓦質の羽釜である。口縁部から鋸部にかけて浅い凹線を巡らせ、鋸部から下方はへらで削っている。内面には横方向の細かい刷毛調整を施す。104は段顎の軒平瓦で、瓦当文様は唐草文である。

(c) 第3層出土の遺物

10・11は中国製の染付皿で、ともに外面体部に牡丹唐草文を描く。10は内底に玉取獅子を描く。12は体部が直線的に立上り、口縁部が強く屈曲する美濃瀬戸系の天目茶碗である。13～15はいずれも赤橙色を呈し、胎土に礫を含み、強いナデのため口縁部が肥厚するタイプの土師器小皿である。

(d) S K 0 I 出土の遺物

16は美濃瀬戸系の内面底部に昆虫様の染付文様を持つ褐釉の碗である。高台は比較的丁寧に削りだされ、畳付は水平に削られている。17は灰釉の水滴である。18は口径10cm強を測る、小振りの白色系土師器中皿である。口縁部のナデが強いため、体部中位に段を持つ。19・20は小振りの赤色系土師器中皿である。通有タイプの小皿同様口縁端部が肥厚する。21は甕で、褐釉の施された近世の陶器である。105は尾の長い巴文に珠文を20珠配した鳥衾である。106は巴文の軒丸瓦である。

(e) S D 0 I 及び掘形出土の遺物

22は口縁端部が垂下する常滑焼の甕で、根来寺に搬入された常滑焼甕の最終段階のものである。23はにぶい赤褐色を呈する備前焼の摺鉢で、口縁端部は上方に引き上げられ拡張されている。24・25・107は通有の土師器小皿である。26はS D 0 I 出土の、口縁部がわずかに外反する朝鮮製の碗である。体部外面には灰色の釉を施釉するが、削り痕が明瞭に残る。

b III区出土の遺物

(a) 表土出土の遺物

27・28は中国製の青磁碗である。27は口縁部に雷文帯を巡らせ、体部には劃花文が施されるものと思われる。28は体部内外面に片切彫の劃花文が施される。

b 第1層出土の遺物

29～32は土師器中皿である。33～36は土師器小皿である。37・108は東播系のこね鉢である。いずれも口縁端部が上下方にやや拡張されている。

(b) SK10 出土の遺物

38～42、109～111は土師器小皿である。43は口縁部のナデが強く、口縁部と体部の境界に段を持つ土師器の中皿である。44・45は土師質の火鉢である。44は口縁端部を外方に引き出し上端部を水平にし、体部にはやや丸みを持たせ1条の断面三角形の貼り付け凸帯を巡らせる。45は底部からほぼ垂直に立ち上がる体部に、わずかに内傾する口縁部を持ち、外面体部にはナデ調整を施すがやや作りが粗い。46は頸部直下に櫛による波状文の施された備前焼の小型壺である。112は尾の長い巴文に珠文16珠を配した軒丸瓦である。

(c) SK13 出土の遺物

47は外面体部に線描連弁文の施された美濃瀬戸系の青磁碗である。胎土は灰白色、釉は黄色を帯びたオリーブ色を呈する。48は外面口縁部に波濤文を巡らせ、外面体部には牡丹唐草文を描く、中国製の染付碗である。49～52は土師器小皿である。49～51は通有タイプ、52は黄白色を呈し、口縁部が斜め上方に緩やかに立ち上がるタイプのもので、胎土、焼成とも良好である。

(d) SK19 出土の遺物

53は近世の丹波焼壺である。口縁部近くに断面三角形の貼付凸帯を巡らせ、口縁端部内側は直線的に斜め外方に強いナデが施される。

(e) SD01 出土の遺物

54～59は中国製白磁の端反皿である。60は体部外面に牡丹唐草文を、内面底部に羯磨文を描く、中国製の染付皿である。

(f) SX03 出土の遺物

61は外面口縁部に6珠1単位の円形浮文が貼り付けられた瓦質の火鉢である。

c IV区出土の遺物

(a) SK01 出土の遺物

62～64・113は中国製磁器である。62は体部外面に列点文を配する中国製の染付碗、63は内面底部に牡丹文を描く皿、64は白磁の端反皿、113は呉須手の大皿である。65は土師器のへソ皿である。66・67は唐津焼の碗である。

(b) SB03 出土の遺物

68～75・114は中国製の白磁皿である。いずれも高台壘付部は内外両面から釉を削り取り尖った断面をもつ。70・73・75・114の外面底部には福の銘がみられる。76～78・115・116は中国製の染付皿である。いずれも外面体部口縁端部に1条、高台近くに2条の圈線を巡らし、内面口縁端部に2条の圈線を巡らせ、内面底部に牡丹文を描く。

(c) SF01 出土の遺物

79は中国製青磁の小型壺である。体部には片切彫の劃花文が施されている。80は口縁部直下に2条の沈線が施された中国製青磁の碗である。81は中国製白磁の端反皿である。84～86・117は土師器小皿である。84～86は通有タイプ、117は口縁がやや内弯するタイプである。

III まとめ

本年度の調査地点4ヵ所のうち、I区では大門に関係する遺構は検出されず、大門のすぐ南側まで子院が建てられていたことが判明した。また過去の調査でも、大門の北側、東側にも子院の建てられていたことが判明しており、旧西大門は現大門の建つ地点とほぼ変わらないであろうことが推測されるに至った。御廟西側のIV区でも埋甕遺構が検出されており、御廟に接して子院の建てられていたことが判明した。さらに各調査区において天正13年の焼土層や焼土炭混じりの埋土を検出しており、兵火後再度整地され近世の子院が再建されていることが明らかになった。

今次の5ヵ年の調査対象とした地点は、いずれも根来寺にとっては重要な位置を占める子院の建てていた地域であり、そういう意味では近世の復興時にいち早く子院が再建されたものと考えられる。中世遺構の残存状態の悪いのは、この時の子院敷地の造成が大がかりなものであったことを示すものと考えられ、開山期はもちろんのこと隆盛期の根来寺については解明はできなかった。

今回の調査での注目すべき遺構として、次の遺構がある。まとめにかえ、多少の考察を加えて見たい。

(1) 大門西側のI区で検出したSD01は、これまでに検出した暗渠排水溝とは異なり、開所とみられるもの2ヵ所が5.3mの間隔をあけ検出された。特に西側のものには偏平な大石で蓋がしてあり、この部分に水を集めるとか、清掃をするためのものとも考えられず、その用途は明確ではないが、門前にあることからみて幡の柱を立てる据付穴の可能性も残る。

(2) II区で検出した半地下式倉庫はこれまでに20数例が検出されているが、その規格・規模に統一性がない。共通点としては、壁が焼け赤く変色していること、収納されていたであろう物が見付かっていないことなどがあげられる。この種遺構の用途については今もって不明といわざるを得ない。今回検出のこの半地下式倉庫は、建物の床下に設けられた穴蔵様の施設と思われる。

(3) III区で検出したSG01は、現存する中世の池やこれまでに検出した池とは異なり、幾何学的な対象形を呈し、枯山水的な要素を備えており、池内中央の楕円形の空間は築山とみられる。

このうち、半地下式倉庫としたものは、根来山内ではこれまで不動堂以西から20例を越すこの種の遺構が検出されている。しかし、形態、規模、構造いずれをとっても規則性がなく、その位置についても敷地内において特定されてはいない。ただ共通する点として、周壁すべてが火を受け赤変していることである。この火を受けた壁はこれまで天正の兵火によるものと考えられてきたが、均一に焼けていることや埋置した備前焼大甕に火を受けた痕跡がないことなどから、火災によるものではなく、防湿、壁面強化などの意図を持って焼いたものとみられる。また、その用途については目下のところ不明といわざるを得ないが、大別して備前焼大甕を埋置したものとそうでないものがあるが、大甕が埋置されたこの種の遺構はその規模が大きい。そのほとんどは単体で上屋を持つとは考えられず主屋に取り込まれた形で造られていたものと考えられる。いずれにせよ倉庫というか貯蔵庫といった性格のものであり、呼称も「穴蔵」とするほうがよりふさわしいように考えられる。ただ、大甕を埋置するとともに、幅50~60cmの棚・小振りの井戸・水溜などの施設を持つ一見厨房を思わせるようなものもあるため、一概に倉庫というか貯蔵庫としての用途とすることもできないが、その性格については今後子院敷地全面におよぶ発掘調査をまつ必要がある。

IV 根来寺坊院跡の保存と整備

根来寺坊院跡の保存計画に関しては、平成3年3月発行の『根来寺坊院跡－発掘調査10年の歩み』に詳述されているのでこの保存整備計画（案）を再録しておく。

史跡指定計画と買収計画

根来寺山内は歴史的景観が比較的良好に保存されてきた。しかし、大規模農道の建設あるいは町道の整備、さらには、民間等の住宅、店舗等の建設による開発から歴史的景観を保存するには、史跡指定と根来寺山内の史跡整備を進めなければならない。

根来寺の歴史的景観の保全範囲は現在県道泉佐野岩出線から県緑花センターに至る、いわゆる根来寺山内とその南北の山塊を含む必要があり、その面積は東西約1.7km、南北約1kmの緑あふれる景観を対象とすべきである。

しかし、土地所有の実態、あるいは開発との緊急な対応から史跡指定の範囲は山内の平地部と南側の山塊、すなわち前山の北斜面と北側山塊の南斜面を中心とした地域になってこよう。

平地部の史跡指定については、宗教法人根来寺有地を中心に、円明寺等主要寺院跡を包括した指定が必要である。また、この他、発掘調査で確認されている古道、これに面して造営された主要な坊院跡を指定すべきであろう。

また、前山については東西に連なる稜線より南斜面の一部を含めた頂稜部と北斜面は城塞的な性格を保存するために全域指定が望まれる。また北山の南斜面は国指定名称根来寺庭園を含む周辺山稜部の指定が必要である。

これら指定地は将来史跡公園として整備をすすめ、一般の人々が山内を散策するとき、豊かな自然環境の中で、根来寺の歴史的記念物を全面的に享受できるに最小限必要な面積でもある。

史跡指定地の買収地域は主に民有地を優先することとし、遺構の露出展示や復原が可能な地域を対象とする。また必要に応じ寺有地の円明寺等主要寺院のうち土塀や住房等が復元整備できる地域の買収を進める。

史跡公園整備計画

1 遺構展示地区

発掘調査によって明確になった坊院跡、古道などを平面的に復原する。坊院跡の全貌が最もよくわかる例を選び、石垣、門跡、堂跡、住房跡、倉庫跡などの基礎遺構の露出展示を行い、根来寺坊院跡特有の埋甕遺構の展示では備前焼大甕を復元焼成し展示するなど実感として理解できるよう図る。対象地点は桃坂谷、密巖院東部に配し、大阪側の旧和泉街道と東部からの導入に備える。

2 立体復元地区

発掘調査の成果、文献資料などに基づいて、建物、土塁、濠、井戸、庭園などを可能な限り正確に当初の姿に立体的に復原し、坊院の宗教生活の環境を見学者に視覚的に理解させる展示で、現存する堂あるいは住房などを活用する方法も検討する。

対象地点は円明寺、大塔周辺、錐鑽不動堂など根来寺の中心地域のほか西側の県道泉佐野岩出線

からの導入口である大門周辺をあてる。

3 修景地区

未発掘地区は、発掘調査での知見と現状地形、文献資料などを参考にして、できる限り往時の姿を偲ばせるよう地域住民の協力を得て修景を行う。

現在の駐車場は芝生、低木を植栽し静的レクリエーションの場とするなど公園利用を再検討する。なお、人家密集地の周囲には緑地の緩衝地帯を設け、住民の生活を利用者の喧噪からまもるとともに民家集落と歴史的景観との調和を図る。

4 山林保全地区

自然環境の大部分を占める前山および北山は遠景、中景としても重要なものである。遠景あるいは借景として活用価値の高い北山は現状を維持する。前山は南門跡の整備地点もあるので、南門跡への導入を図る山道を整備するとともに、下草、小枝を伐採し、山林に薪炭を求めたであろう往時の山林を復原する。

5 施設地区

史跡公園の核となるのは宗教法人根来寺と岩出町民俗資料館である。

宗教法人根来寺は往時の根来宗徒の精神を参拝、参観者に訴えるとともに、宗教施設を通じて人々に精神的な安らぎを与える。また、名勝の庭園なども巡回式に展観できるよう図る。

岩出町民俗資料館は根来寺の歴史を遺構模型展示、遺物展示、ジオラマ等を用いて見学者に学術的に理解を促すとともに、図書室、資料室などを一般の活用に供し根来塗実習等体験学習の場とするなど学術的基地とする。

また、根来寺西部の若もの広場はスポーツの場とともに駐車場や歴史イベントなどの広場として活用する。更には、県緑花センターでは岩出町民俗資料館での根来塗の実習などを行うため、漆畑などを復原するなどして中世根来寺をメインとしたイメージをわきたたせるような展示、活用を図る。

開発との調整と史跡管理

史跡公園が完成した姿は宗教法人根来寺の土地や諸施設、あるいは民間より公有化した土地、整備施設などが混在するためその維持管理は種々の方策が考えられるが、最も適当なあり方は、県、岩出町、宗教法人根来寺が応分の負担を分かちあうため共同出資の法人を組織して公園施設の管理に当たるのが望ましい。

なお、史跡指定地外の開発には十分な事前調査が必要で、追加指定も考慮に入れた保存対策が望まれる。史跡指定に至らない場合は、開発構造物は史跡公園地内にふさわしい形状にするなどの配慮が必要である。

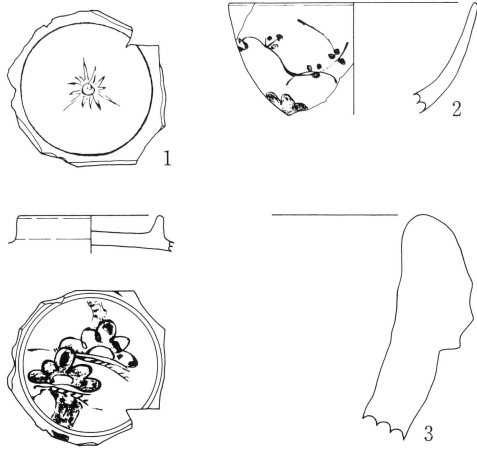
図

•

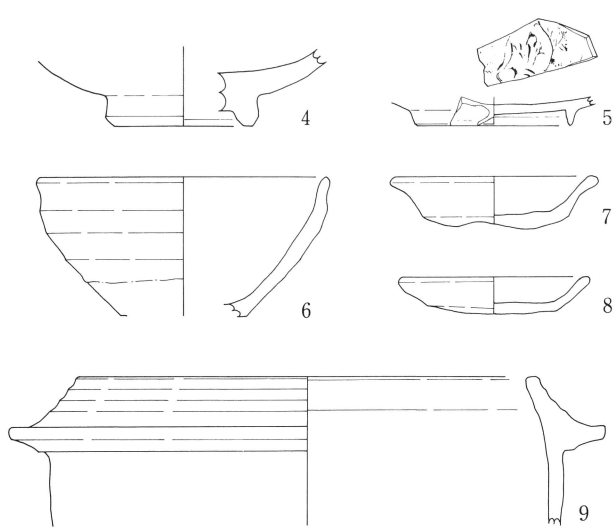
図

版

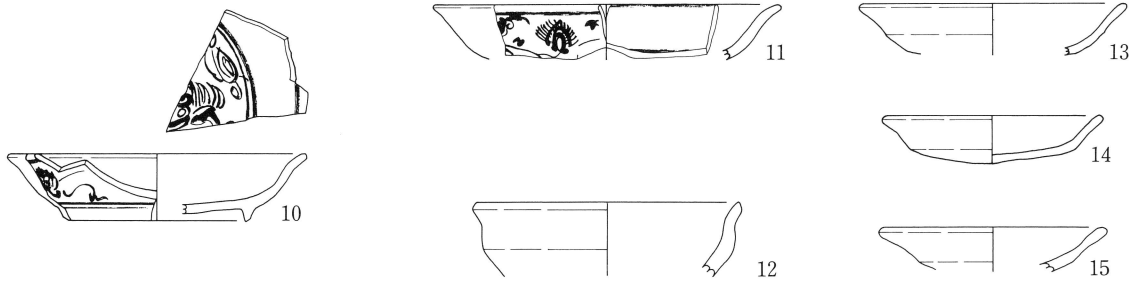
I区 1層 (1~3)



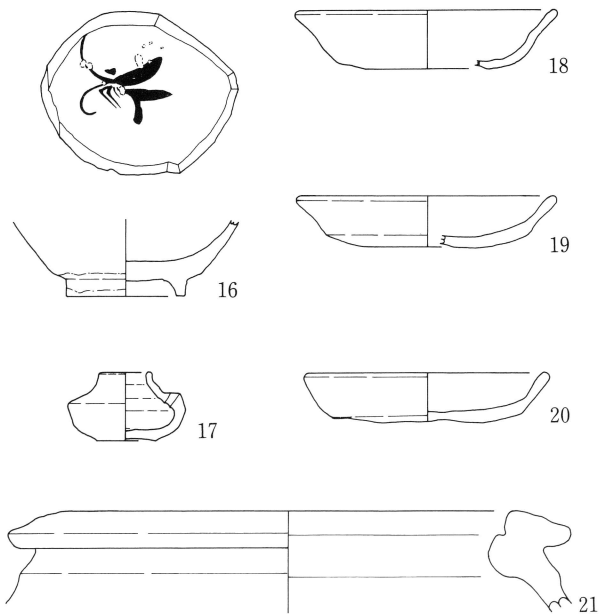
I区 2層 (4~9)



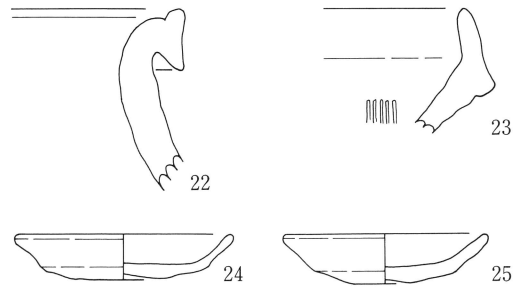
I区 3層 (10~15)



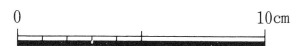
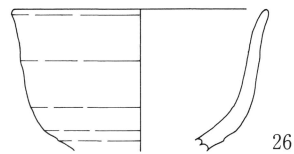
I区 SK01 (16~21)



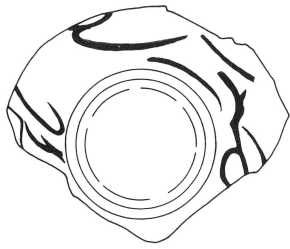
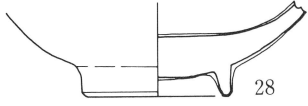
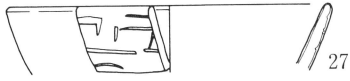
I区 SD01掘形 (22~25)



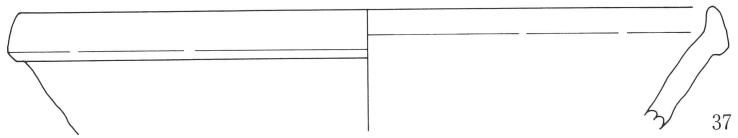
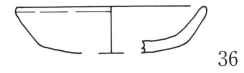
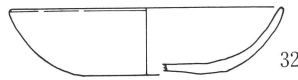
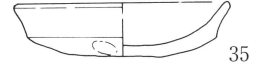
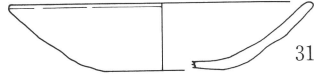
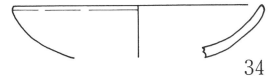
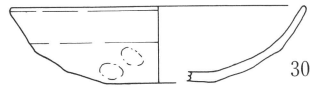
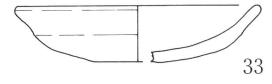
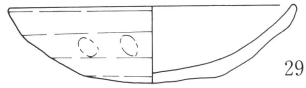
I区 SD01 (26)



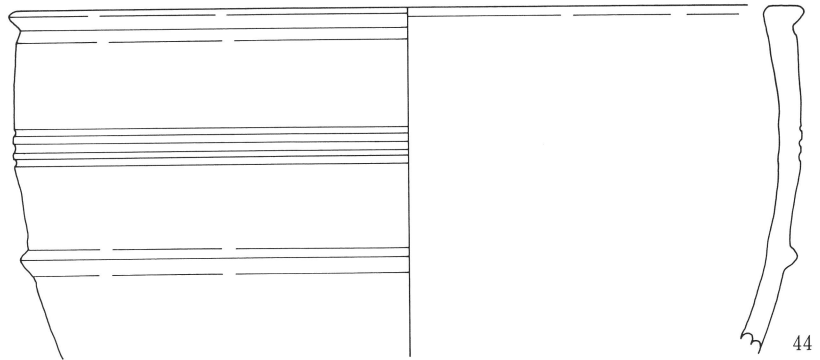
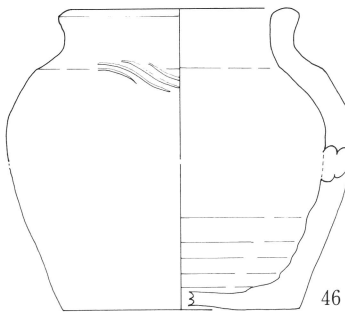
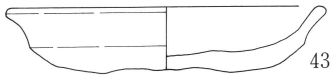
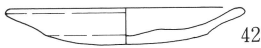
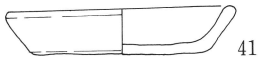
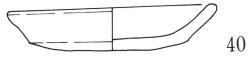
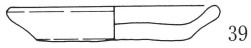
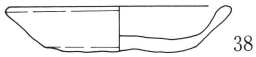
Ⅲ区 表土 (27~28)



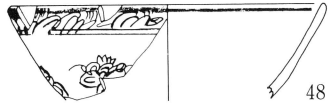
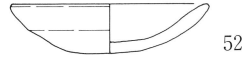
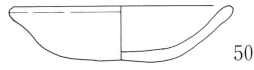
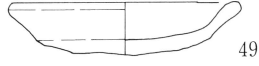
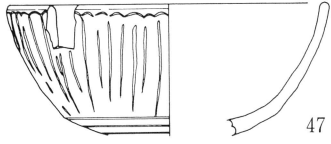
Ⅲ区 上層 (29~37)



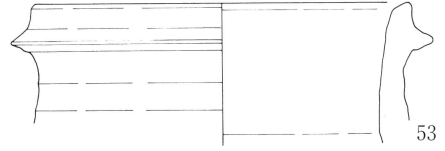
Ⅲ区 SK10



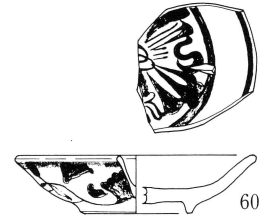
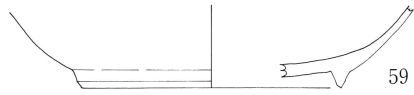
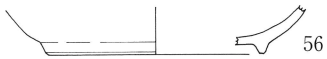
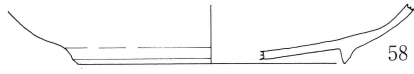
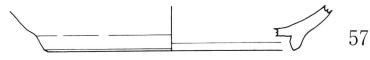
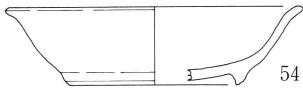
III区 SK13 (47~52)



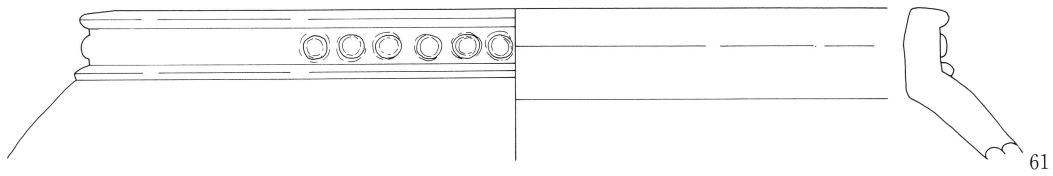
III区 SK-19



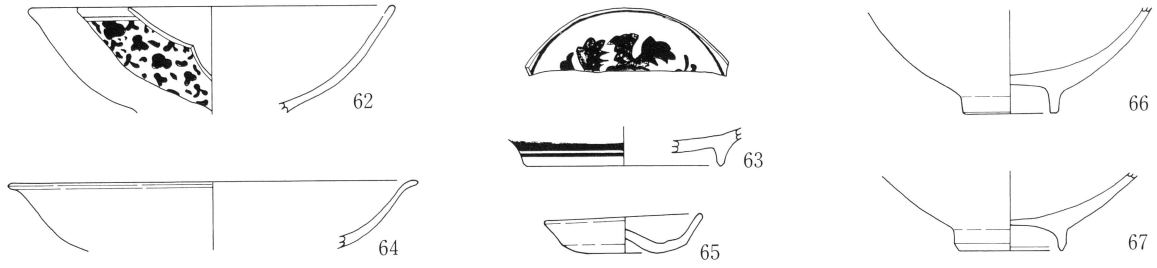
III区 SD01 (54~60)



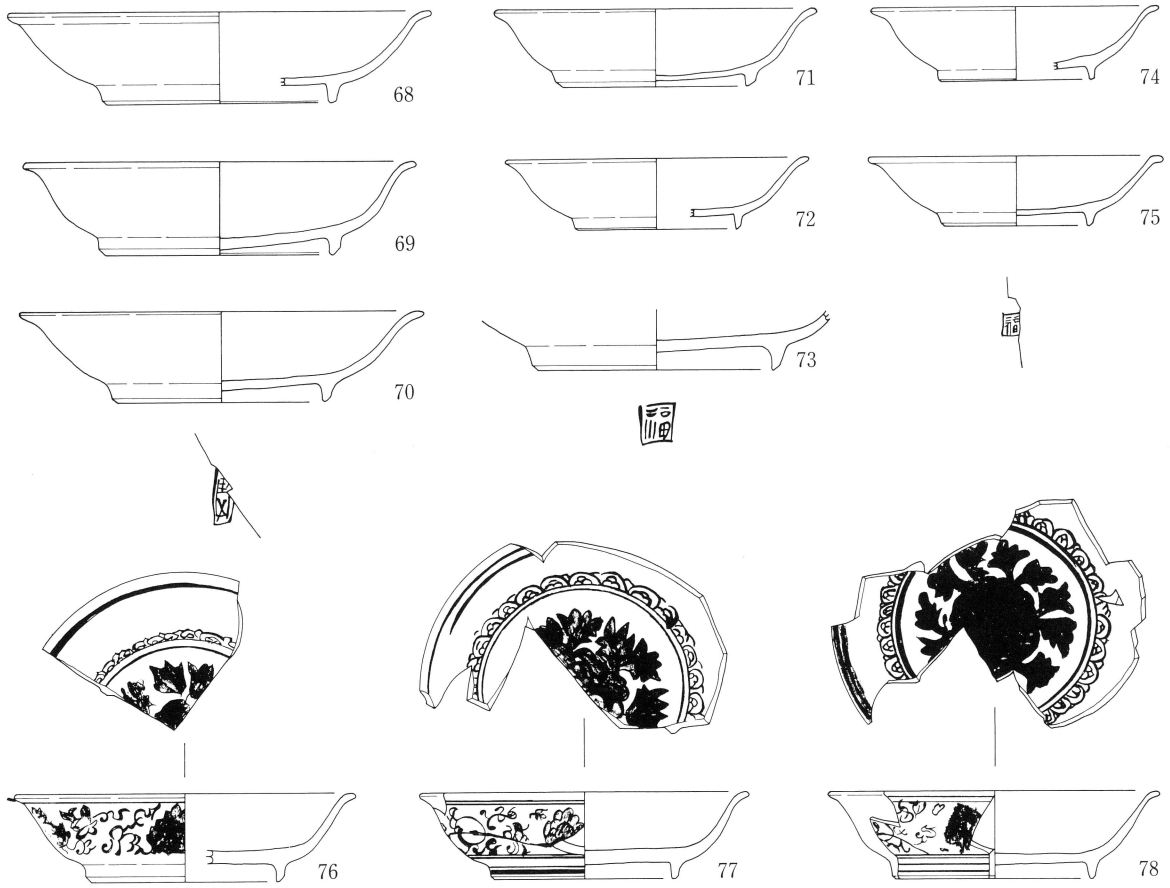
III区 SX03



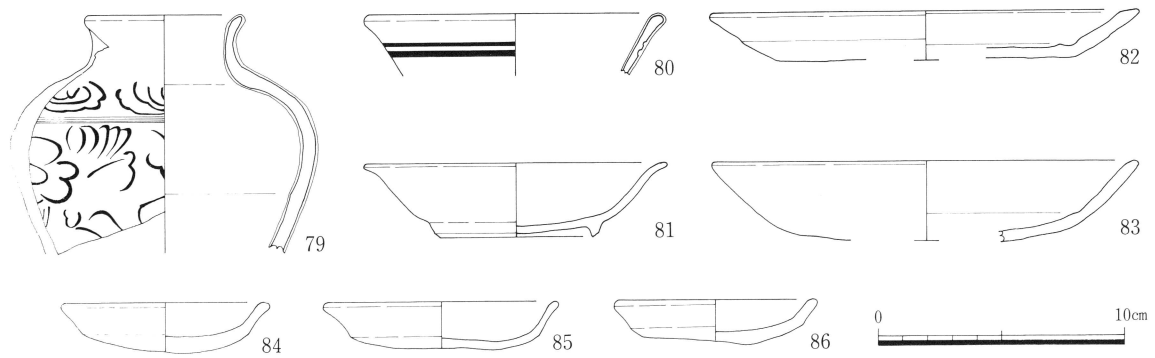
IV区 SK 0 1 (62~67)



IV区 SB 0 3 (68~78)



IV区 SF 0 4 (79~86)





イ



ロ



ハ



ニ

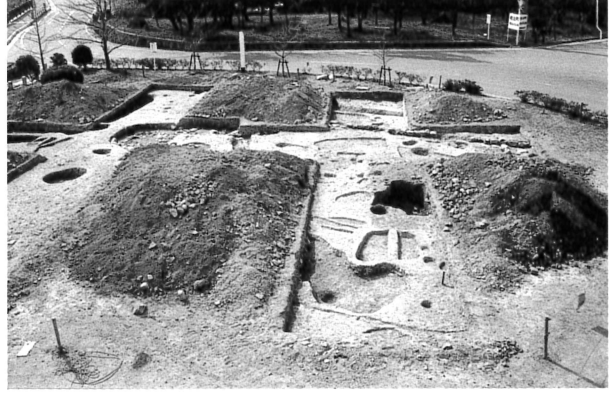
- イ I区 トレンチ全景(南から)
ロ " " (北から)
ハ " S D01全景 (西から)
ニ " " (西から)
ホ " S X01 (東から)



ホ



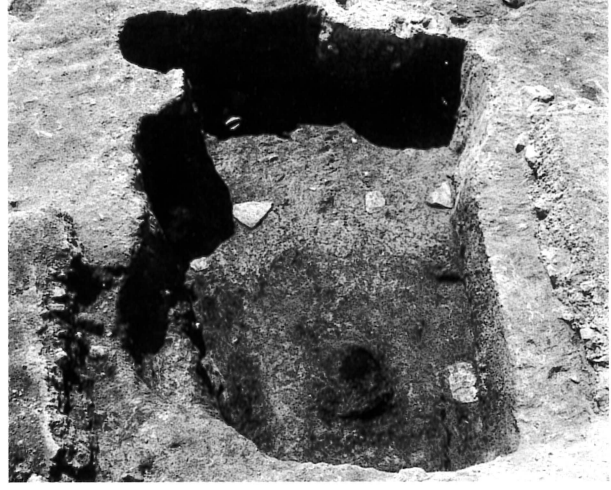
A



B



C



D



E



F

A III区 南半全景

B " 北半 "

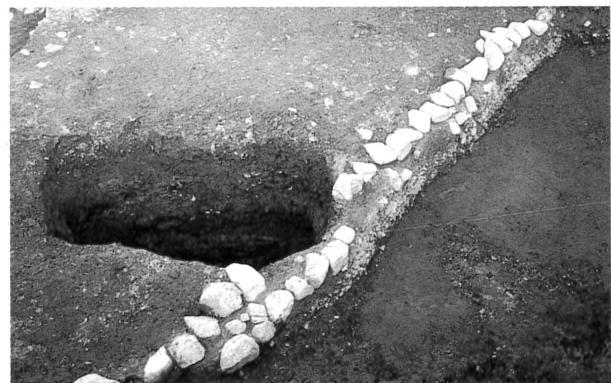
C " SB01全景(西から)

D " " (北から)

E SG01 全景(北から)

F " " (南東から)

G SV01 " (南西から)



G

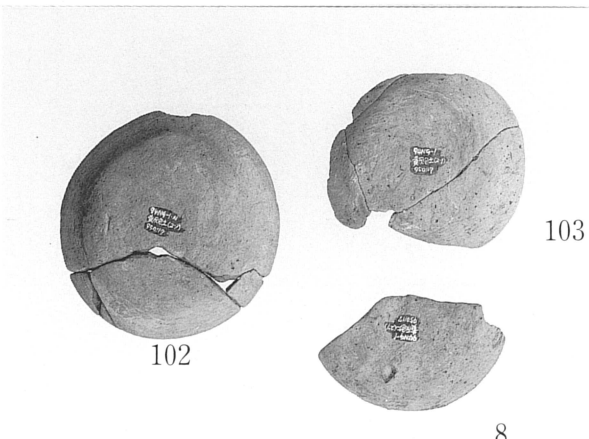
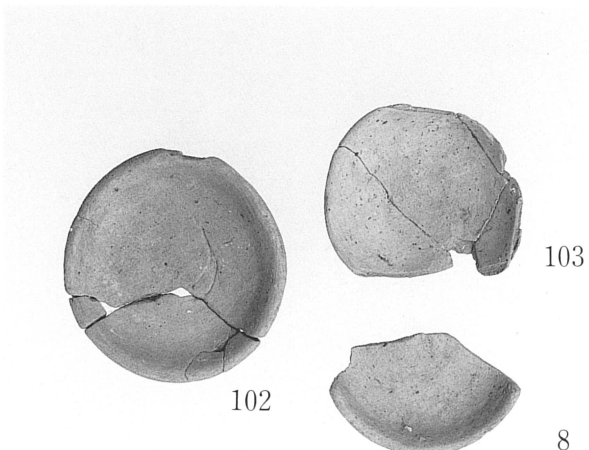
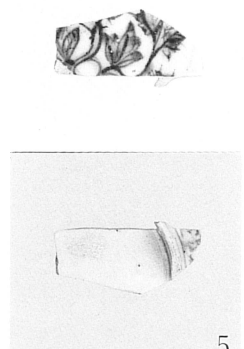
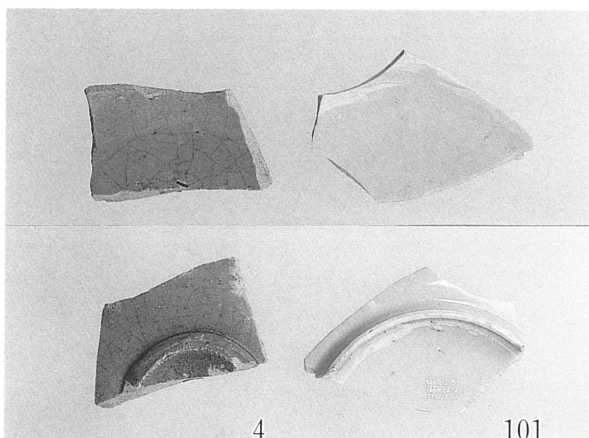
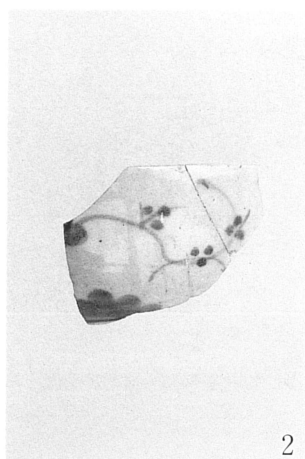
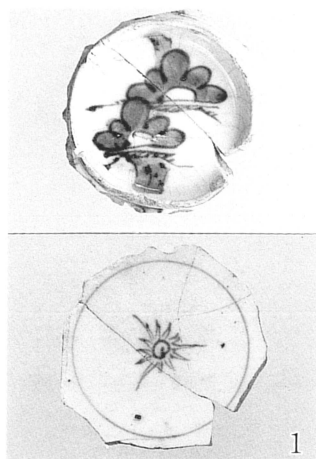


IV区 南北トレンチ全景

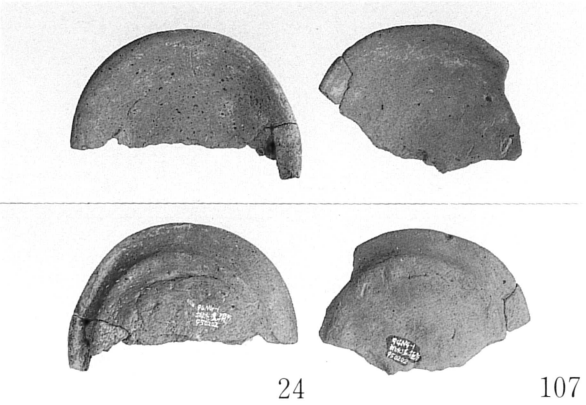
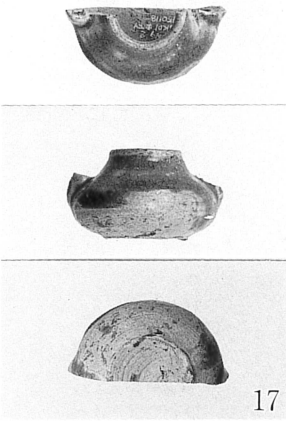
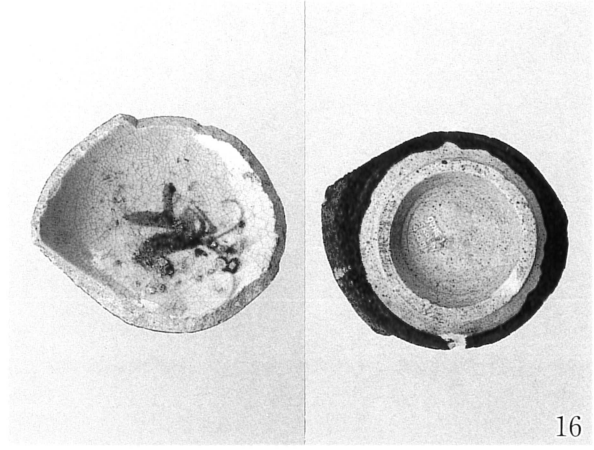
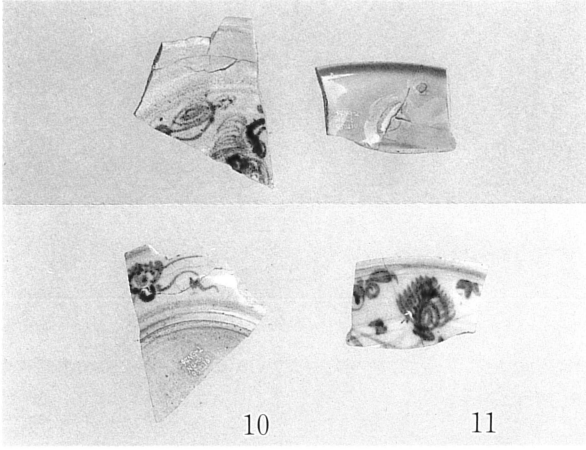
IV区 東西トレンチ全景

IV区 S X03

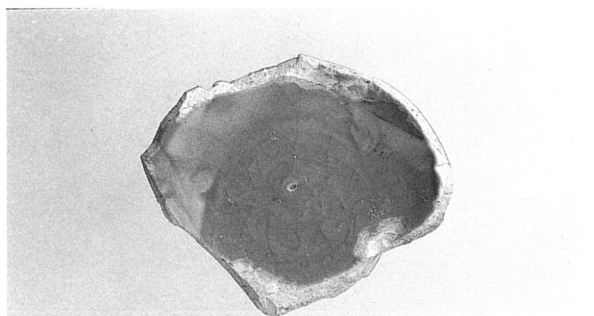




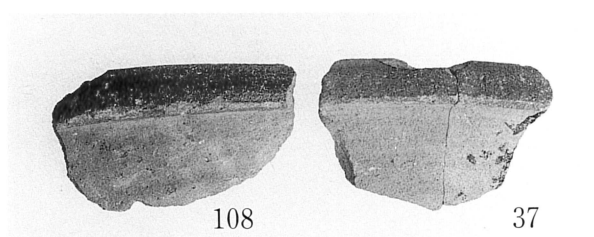
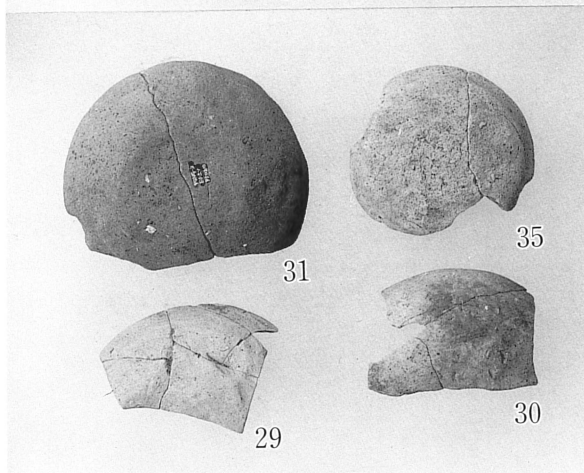
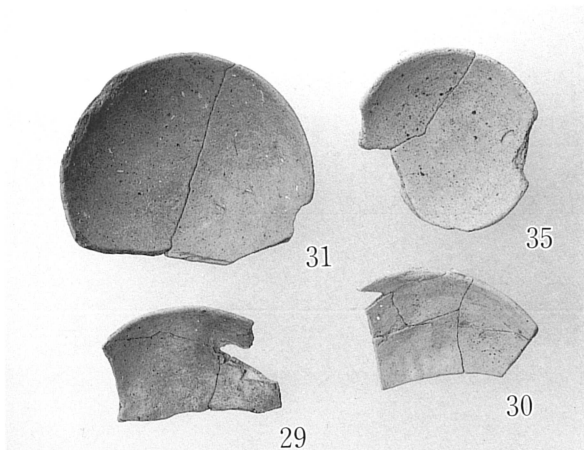
图版 4 I 区出土遗物



图版 5 I区出土遗物

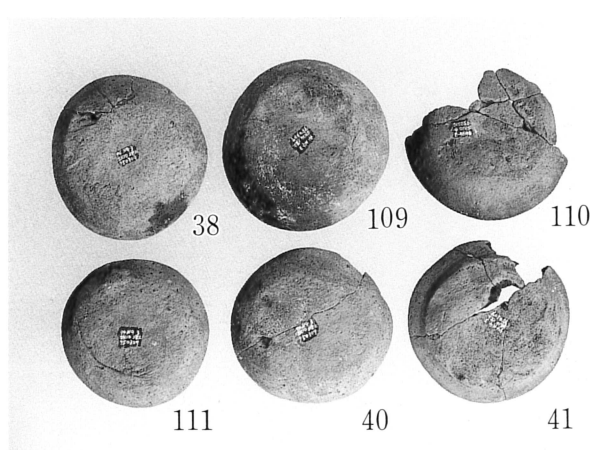


28



108

37



38

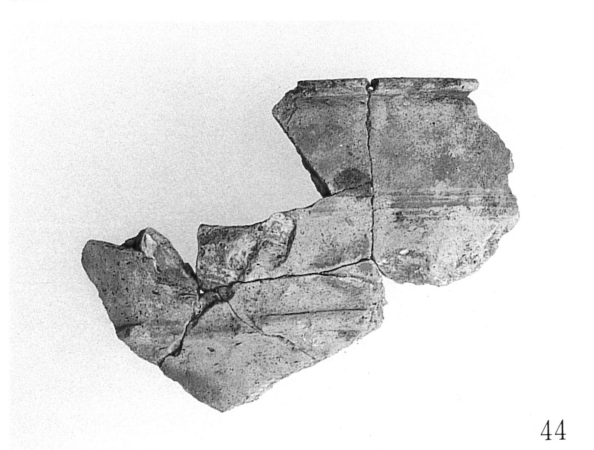
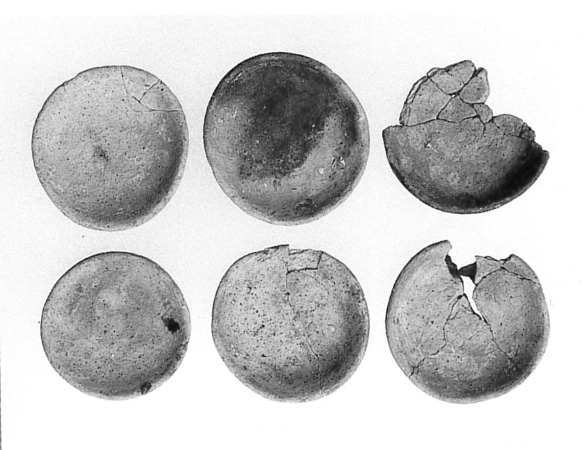
109

110

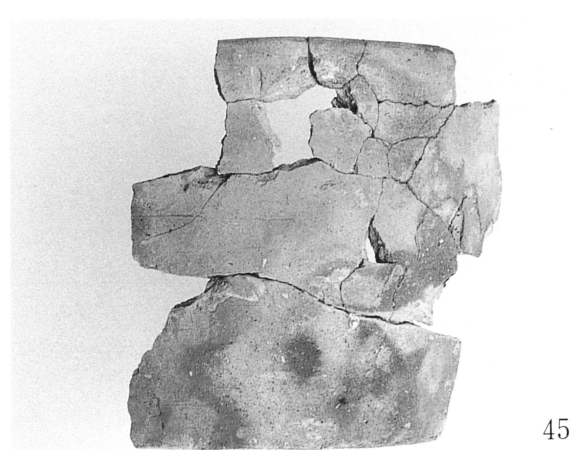
111

40

41



44



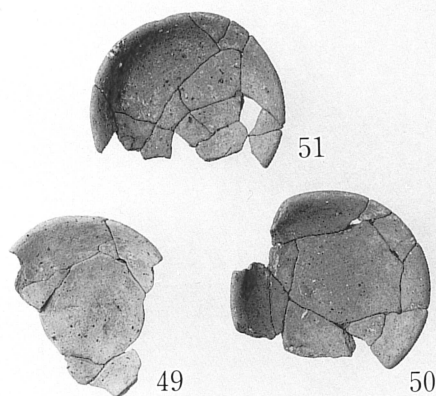
45



46



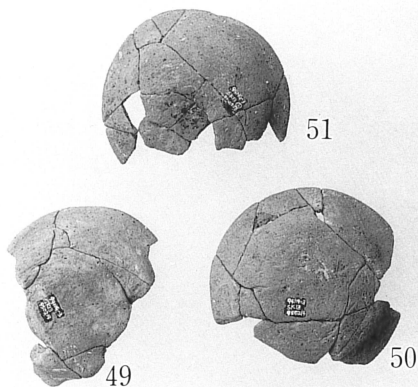
112



51

49

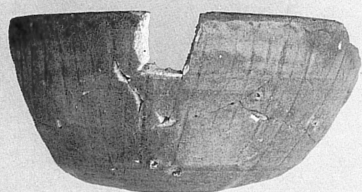
50



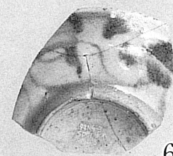
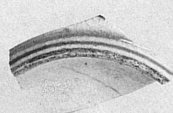
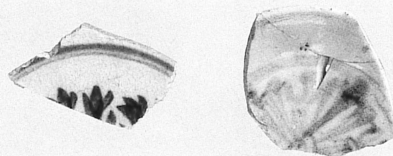
51

49

50

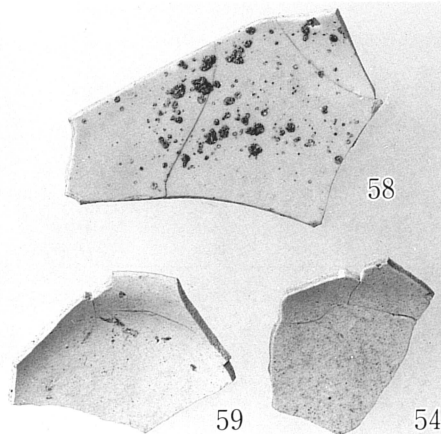


47



57

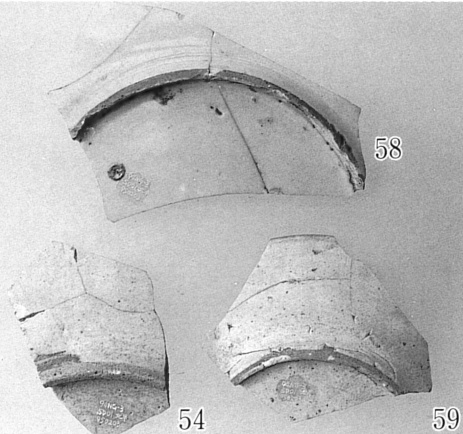
60



58

59

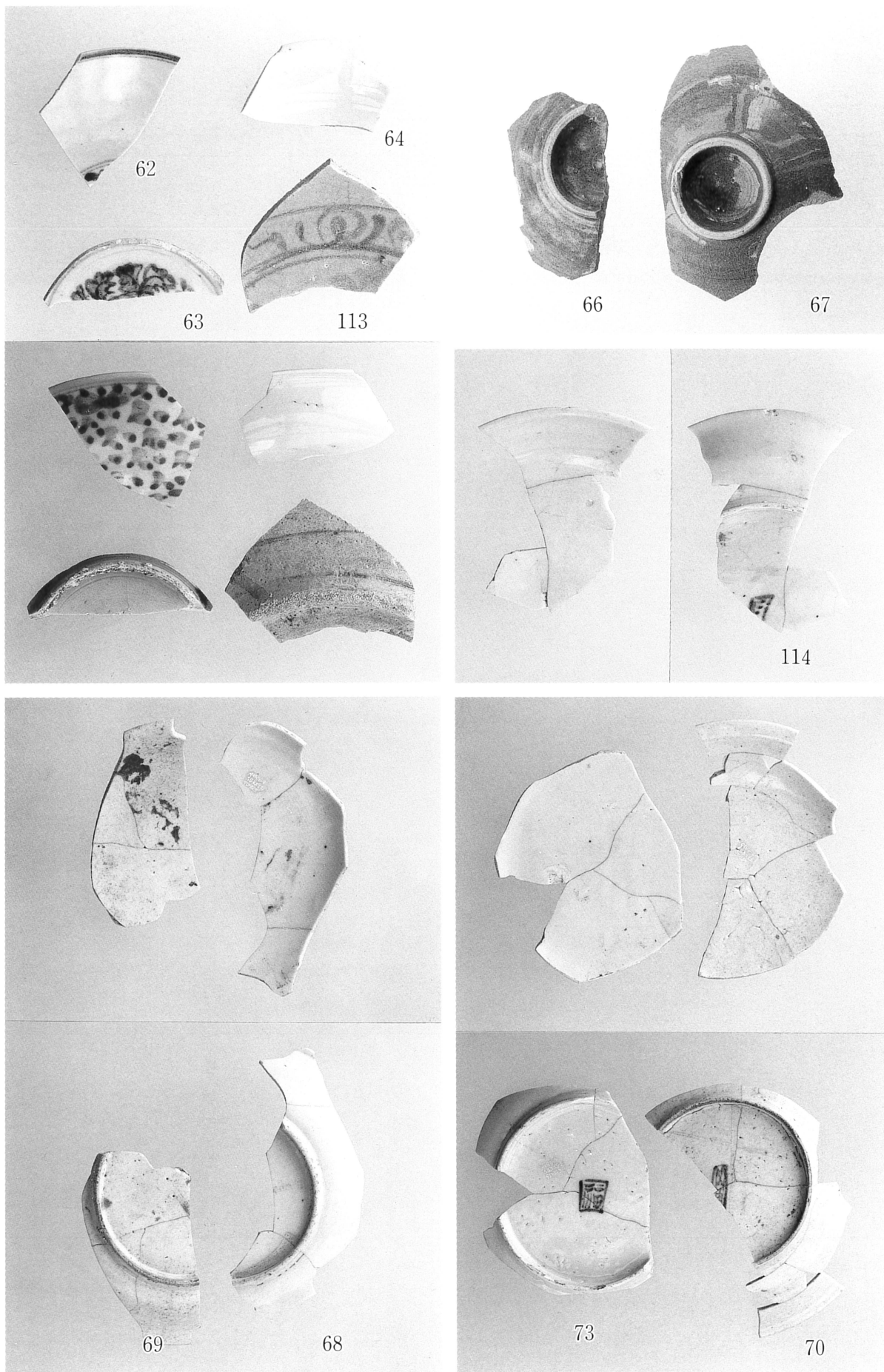
54



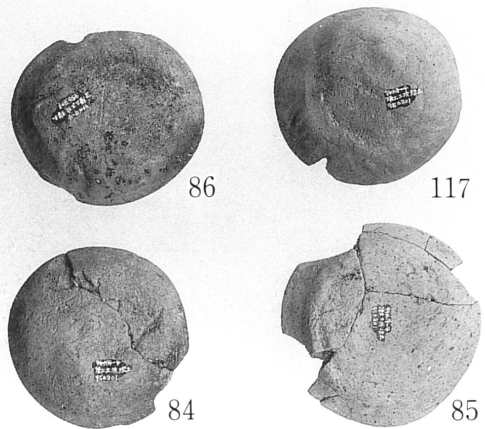
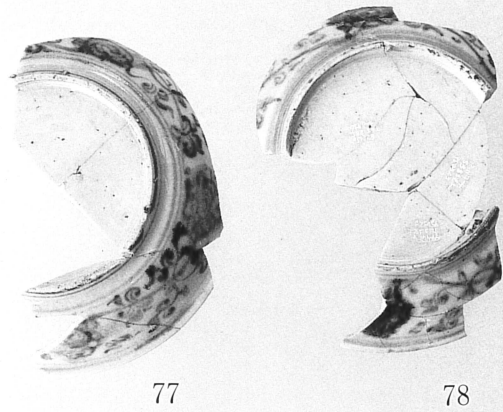
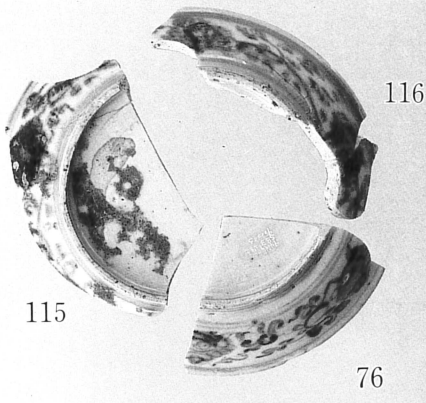
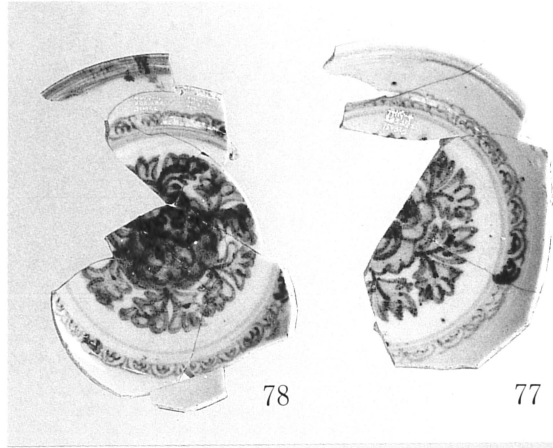
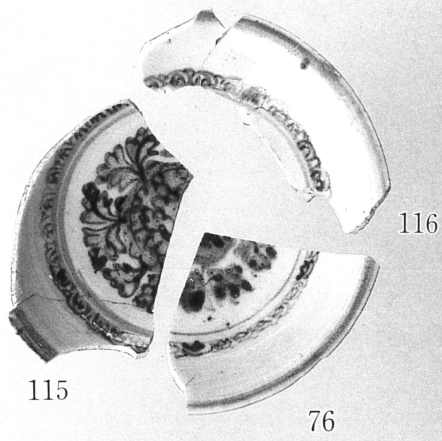
58

54

59



图版 8 IV区出土遺物



图版 9 IV区出土遺物

根 来 寺 坊 院 跡

平成7年3月 発行

編 集 和歌山県教育庁文化財課
発 行 和歌山県教育委員会
印 刷 中和印刷紙器株式会社
